Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

315
148
315-148
1200701773993

315-148

バチェラー、オヴ、ロース 松平康國述

史記講義

早稲田大學出版部藏版

大正
4. 5. 11
製本

史記講義目次

項羽本紀
鉅鹿之戰……一
鴻門之會……九
垓下之戰……二三
伯夷傳……三三
商君列傳……四四
樂毅列傳……七二

史記講義目次

史記講義

本大學教授 松平康國述

項羽本紀

鉅鹿之戰

章邯令王離涉間圍鉅鹿。

章邯は秦の將なり、楚の項梁を破りたる勢を以て趙を擊ち復た之を破りしかば、趙の君臣は敗走して鉅鹿城に入り、此に據て防戰せんとせしを圍ましめたるなり、但し趙の王は趙歇、宰相は張耳、將軍は陳餘なり

王召宋義與計事。而大說之。因置以爲上將軍。項羽爲魯公爲次將。范增爲末將。救趙。諸別將皆屬宋義。號爲卿子冠軍。

此は趙を救ふ發端にして楚の諸將の位地を叙す、王は楚の懷王の事なり

行至安陽留四十六日不進項羽曰吾聞秦軍圍趙王鉅鹿疾引兵河楚擊其外趙應其內破秦軍必矣宋義曰不然夫搏牛之蝨不可破蟻蝨今秦攻趙戰勝則兵罷我承其敝不勝則我引兵鼓行而西擧秦矣故不如先鬬秦趙夫被堅執銳義不如公坐而運策公不如因下令軍中曰猛如虎狠如羊貪如狼強不可使者皆斬之

此れ軍機に就き宋義と項羽と意見の衝突する處にして、又私怨の由て生ずる處なり、今楚が趙の危急を救ふに當り、四十六日の久しきも逗留して進まざるは、宋義に於て緩怠の罪を免れず項羽の意見は速に黃海を渡り趙と內外相應じて秦を破るに在り、宋義は之に反對し搏牛之蝨不可以破蟻蝨と云ふ、此意味今牛背にある蝨を手にて打つときは背の蝨を殺すことを得るも、小なる蟻蝨を破り裂く能はず、今現に大國の秦を亡ぼさんとする我軍は鉅鹿の如き小なる者を救ふの暇なし、又一說に蝨に數種あり、大木蝨と云へるは長大にして綠色、殆ど蟬の如く、牛馬に附くときは牛馬或は之が爲に顚倒するに至る、又蜚蝨と云へるあり、蜜蜂に類し色は黃黑、又一種小なる者を鹿蝨と名づく、其大さ蠅の如く、牛馬を噬むこと猛烈なり、乃ち搏は

附の字の意に解し「牛に搏するの蝨」と讀む、其意味は牛に附着する蝨は牛の身上に在る蟻蝨を取るに非ずして、更に大なる處に志を有す、即ち小なる鉅鹿を救ふの目的に非ずして大なる秦國を仆すを以て主意となすと、宋義又云ふ若し秦勝たば兵疲れん我は其疲れたるに乘ずべし、秦敗るれば攻太鼓を打て西方に進軍し、樹木を引拔くが如くに秦を打平げん、故に何れの道双方を戰はせ置くを得策とす、堅甲を着し、利器を手にして戰場に往來するは此方貴公に及ばざるも、計を帷幄の中に運らすは貴公此方に及ばずと、是は戰術の上に於ては己れ上手なれば是非とも我が意見に從はざるべからずとの意なり、是れ已に項羽を怒らすに足る、然るに又令を陣中に下し、猛きは虎の如く、意地の曲れる羊の如く、慾の强き狠の如く、手硬くして使ひ惡き者は之を斬ると、是れ明々項羽を指せしものにして其言の毒なる項羽に非ざるも亦恨骨に徹すべし、況や彼の重瞳子をや

乃遣其子宋襄相齊身送之至無鹽飲酒高會天寒大雨士卒凍饑項羽曰將戮力而攻秦久留不行今歲饑民貧士卒食芋菽軍無見糧乃飲酒高會不引兵渡河因趙食與趙併力攻秦乃曰承其敝夫以秦之

nanto shan no toboshiki Tokorononarukana

彊。攻新造之趙。其勢必舉趙。趙舉而秦强。何敝之承。且國兵新破。王坐不安席。掃境內而專屬於將軍。國家安危。在此一舉。今不恤士卒而徇其私。非社稷之臣。

宋義兵を進めざるのみならず、其子を齊の宰相たらしめ、自身陣所を離れて之を送り、無鹽と云へる土地まで出張して盛大なる宴會を開けり、高會とは猶ほ大會と云ふが如し、時に氣候寒きが上に大雨降りしがば士卒は凍えて苦痛に堪へず、又當時糧食も不足にて飢餓の際なれば、宋義の所爲は殊に人目を引けり、項羽は是れ迄怒を忍びたりしが此に至て滿腔の不平を洩らし、宋義を非難して云ふ、本來互に力を合せて秦を攻めんとするに、長く逗留して兵を進めざるのみか、今年は凶年にして穀物豐らず、民間も從て貧窮に陷り、兵士の如きは食芋菽、芋或は半に作る半菽とは野菜に豆を半分雜ゆるなり一說に半は五合入の升を謂ふと、今軍中に差當りの兵糧も在らざるに、大將たる者酒宴を開いて遊興に耽るは奇怪千萬なり、且つ兵法より言ふも、早く河を渡て趙の糧食を利用し趙と共に秦を攻むべきに、此には出ずして秦の疲に乘ずると云ふも、秦は元來强國なるに趙は新成の國にして萬事整頓せざる事故、秦は必ず趙を平げん、趙を平げなば秦は益す强くなるのみなれば何の疲

れかあらん、何の乘すべきかあらん、且吾兄項梁戰死し楚の兵は敗れて未だ久しからず、我王は憂慮の餘り席に安んじ玉はず、一國の兵を盡して將軍に托せられたる以上、今度の一戰は國家安危の分るゝ所なり、然るに今や士卒の寒饑をも心に留めずして自家の私を營み、己れの子を齊の宰相となし大切なる本務を外にするは社稷と存亡を共にすべき忠臣に非ずと

項羽晨朝上將軍宋義。即其帳中。斬宋義頭。出令軍中曰。宋義與齊謀反楚。楚王陰令羽誅之。當是時。諸將皆慴服。莫敢枝梧。皆曰。首立楚者將軍家也。今將軍誅亂。乃相與共立羽爲假上將軍。使人追宋義子。及之齊。殺。使桓楚報命於懷王。懷王因使項羽爲上將軍。當陽君。蒲將軍皆屬項羽。

項羽は宋義を論責せし翌日宋義の處に伺候せり、是れ宋義は上長官のことなれば項羽の方より機嫌を聞きに往きたるにて、項羽も從來地位の相違ある爲め如何に宋義に屈せしかを見るべし、但し此時は固り非常手段を決行するの目的にて宋義の處に至るや直ちに其居る帳中に於て首を刎ね、軍中に令して曰く、宋義齊と內通

して楚に謀反せし故、項羽は楚王の密旨を承けて之を誅せりと、之を前に宋義が項羽を脅すが爲に發せし軍令と對看するときは何等の好反映ぞや、此時に當り、諸將は皆項羽の威勢に辟易し、何人も之に違反する者あらず、慴は怖るゝ事なり、彼等異口同音に曰く、首唱者となつて楚を立てたる者は將軍の家なり、是れ項梁が懷王を立てたるを謂ふ、此の如く大功ある以上今國家の爲に專斷を以て亂賊を誅し玉ふは當然の事なりと、因て共に項羽を假上將軍となして宋義の後任に推擧し、一方には宋義の子に追手を向けしが齊の地にて追附き遂に討果せり、是に於て桓楚を使として事の顚末を懷王に具申し、懷王は改めて項羽を上軍に任じ、當陽君黥布及び蒲將軍之に屬せり

項羽已殺卿子冠軍。威震楚國。名聞諸侯。乃遣當陽君、蒲將軍、將卒二萬渡河。救鉅鹿。戰少利。陳餘、復請兵。項羽乃悉引兵渡河。皆沈船。破釜甑。燒廬舍。持三日糧以示士卒必死無一還心。於是至則圍王離。與秦軍遇。九戰絕其甬道。大破之。殺蘇角。虜王離。涉間不降楚。自燒殺。當是時。楚兵冠諸侯。諸侯軍救鉅鹿下者十餘壁。莫敢縱兵。及楚擊秦。諸將皆從壁上觀。楚戰士無不一以當十。楚兵呼聲動天。諸侯軍無不人人惴恐。於是已破秦軍。項羽召見諸侯將。入轅門。無不膝行而前。莫敢仰視。項羽由是始爲諸侯上將軍。諸侯皆屬焉。

是より始て本題の正文に入る、項羽が威勢赫々たる宋義を一刀の下に殺したるより、其威光は楚國を震動し、其名聲は諸侯中へ響き渡り、兵馬の權吾手に在りしかば、當陽君蒲將軍に步卒二萬を授け鉅鹿を救はせたるも、戰捗々しからざる所より陳餘は更に援兵を請へり是に於て盡く兵を引て黃河を渡りしが、今や河を渡つて進まんとする時に方り、最早此にて兵糧を炊かずとて釜や「こしき」を打壞し、最早此にて兵營を設けずとて建物を燒拂ひ、三日の內に運命を決すべしとて士卒に三日分の兵糧を持たせ、今度の戰は討死の覺悟にして、勝たざるときは食ふに食なく臥すに家なく、到底生命を保ち難き事を示せり、扨愈々鉅鹿の地に到着して王離を圍み甬道を絕切りて之を打破れり、甬道とは道の兩旁に墻壁を築きたる者にして、敵の妨害を避けて糧食を運搬するが爲なり、秦の軍に於ては章邯此甬道より王離の軍に輜重を送りしを、項羽に中斷せられて王離の軍飢餓に迫り、楚は之に乘じて攻擊せしものと覺ゆ、此戰に秦の將蘇角は殺され王離は捕へられ、涉間のみは楚に降ら

ずして自身焚死せり、此大激戰の時楚の兵は諸侯の旗頭なりしが、鉅鹿の援兵として鉅鹿に集れる諸侯の軍は彼處此處に陣する者十餘ヶ所に及び、各壘壁を設けて之に籠り居りたれども秦の勢を畏れ敢て兵を發して戰ふものなく、楚が秦に攻寄る時に至り諸侯の將軍等皆城上に登て見物せし處、楚の兵何れも一人にて敵の十人に向ひ、吶喊の聲は天を動す計なり、諸侯の軍は之を見て其勢の烈しきに恐を爲さゞるはなかりき、愈々秦軍を破て後、項羽は諸侯の諸將を召入れ面會に及びし處、轅門とて戰車の轅を向ひ合せて設けたる陣營の門に入る折柄、何れも皆戰々兢々膝をすつて進み、敢て上を仰ぎ視る者なし、項羽の威力如何に盛なるかを見るべし、此一擧に因て項羽は諸侯連合軍の元帥となり、諸侯は盡く之が指揮を仰ぐことゝなれり、

抑も鉅鹿の戰は項羽一生中尤も得意の戰にして、大史公の史記中尤も得意の文なり、但し一篇の中戰を寫せる正文は九戰絶其甬道大破之と云へる九字に過ぎず、其他は全く四圍の事情より描寫したる爲め筆々生動せるなり、又無不一以當十と云ひ、無不人人惴恐と云ひ、無不膝行而前と云ひ、三の無不を用ゐて文の精神を喚起して躍然たり

鴻門之會

函谷關有兵守關不得入又聞沛公已破咸陽項羽大怒使當陽君等擊關項羽遂入至于戲西沛公軍霸上未得與項羽相見沛公左司馬曹無傷使人言於項羽曰沛公欲王關中使子嬰爲相珍寶盡有之項羽大怒曰旦日饗士卒爲擊破沛公軍當此時項羽兵四十萬在新豐鴻門沛公兵十萬在霸上范增說項羽曰沛公居山東時貪於財貨好美姬今入關財物無所取婦女無所幸此其志不在小吾令人望其氣皆爲龍虎成五采此天子氣也急擊勿失

鴻門の會以前に在ては、高祖と項羽と戰爭の方面は異れども、兎も角力を合せて共同の敵に當りし時代なり鴻門の會以後に於ては兩雄並立て天下を爭ひし時代なり、而して鴻門の會は前後の過渡と言はんより寧ろ劉項戰爭の發端と云ふべきなり、函谷關は今の河南省靈寶縣に在り、秦の本國へ入らんとせば是非とも此處を通過せざる可らず、項羽は秦の諸軍と連戰して之を破り大略關外の地を定めしかば

今や此關に入らんとせしに、何ぞ測らん何處の兵とも知れず之を守て入らしめず又聞く所によれば沛公最早秦の都なる咸陽を攻落せり、去れば此關門を固めたるは沛公の兵に相違なしと、一は功を先きだたれたるに落膽し、一は通路を妨げられたるに憤悶し、當陽君等に命じて攻破らせ項羽は此を過ぎて戲西の地に到着せり、當時沛公は霸上に陣取りしが、己れ本と項羽を防がんとて函谷關を閉せしに、今や其項羽は之を踏破て眼前に在り、勢を言へば到底敵すべからず、往て謝する外途なきなり、然る處未だ其運に至らざるに沛公の左司馬を務むる曹無傷なる者項羽に心を寄せ、歡心を得んとて密使を送り、沛公の事を惡しざまに陳べて曰く、沛公は關中を我物となして其王たる心あり、故の秦王子嬰を己れが宰相とし、秦國の珍寶は盡く之を所有せりと、項羽は大に怒て云ふ明日士卒を饗し勢に乘じて沛公を擊たんと、此時項羽は戲西の新豐鴻門に陣し、沛公は前にもある如く霸上に軍せり、項羽の軍師なる范增は項羽に說て云ふ、沛公以前山東に居りし時は財寶を貪り取り又好色の人なりしに、今關に入り秦を亡ぼし珍寶美女何一つ不自由なきに拘はらず何等の貨財にも手を附けず、如何なる婦人をも近附けざる所を以て見れば、決して小なる目的に非ず恐くは天下に望を懸くるなるべし、此方其道の者に命じ彼の上にたつ氣を望ましむるに、何れも龍虎の狀をなし而も五色なりと云ふ、是れ天子の氣なれば其儘に置くときは彼れ終に天下を取るべし、至急に之を擊ち亡ぼして仕損じ玉ふこと勿れと

楚左尹項伯乃夜馳之沛公軍私見張良具告以事欲呼張良與俱去曰毋從俱死也張良曰臣爲韓王送沛公沛公今事有急亡去不義不可不語良乃入具告沛公沛公大驚曰爲之奈何張良曰誰爲大王爲此計者曰鯫生說我曰距關毋內諸侯秦地可盡王也故聽之良曰料大王士卒足以當項王乎沛公默然曰固不如也且爲之奈何張良曰請往謂項伯言沛公不敢背項王也沛公曰君安與項伯有故張良曰秦時與臣游項伯殺人臣活之今事有急故幸來告良沛公曰孰與君少長良曰長於臣沛公曰君爲我呼入吾得兄事之張良出要項伯項伯即入見沛公沛公奉巵酒爲壽約爲婚姻曰吾入關秋毫不敢有所近籍吏民封府庫而待將軍所以遣將守關者備他盜之出入與非常

也。日夜望、將軍、至。豈敢反乎。願伯具言臣之不敢倍德也。項伯許諾。謂沛公曰。旦日不可不蚤自來謝項王。沛公曰諾。於是項伯復夜去至軍中。具以沛公言報項王。因言曰。沛公不先破關中。公豈敢入乎。今人有大功而擊之不義也。不如因善遇之。項王許諾。

項羽怒つて沛公を伐たんとするに、剩へ范增の項羽を促すあり、沛公の危險は益す切迫に及び、最早逃るゝ餘地なからんとするに當り、一縷の光明は項伯に因て得られたり、彼れ項羽の父の末弟にて楚に於ては左尹の職を勤め居りたるが、平生留侯張良と親交あり、此時張良は沛公に隨從せしかば、明日の戰に捲添へとなるを氣の毒と心得、其夜馬を馳せて沛公の陣に赴き、内々張良に遇ひて項羽が沛公を怒て伐たんとする事の顚末を悉しく告げ知らせし上、張良を呼出して共に去らんとし、之に忠告して云ふ沛公に從て之と共に死する勿れと、嗚呼伯や張良に對する友誼厚からざるに非ず、然れども其身項羽の骨肉なるに、敵中の者に向て吾軍の機密を洩すは私の爲に公を害するものにして、楚の方には初より此の如き人物あり、勝敗の數は已に歷然たり、張良項伯の忠言を聞て云ふ己れは本と韓の臣なり、今韓の爲に沛公を送るなれば、沛公に背くは即ち韓王に背くに同じ、然るに今沛公の身上に危急の事あるを打棄てゝ逃るは不義を免れざる故、是非とも一應語らざるを得ずと、そこで姑く項伯を待たし置き、本陣に入て悉しく沛公に物語せし處、沛公も大に驚き、兎角の問答に及ばず如何せば宜しからんと差當りの方法を尋ねたり、元來沛公自ら函谷關を閉さしめながら、事此に至て狼狽するは殆ど解すべからず、又沛公果して項羽に惡意なりや否を審にせざれば、根本的の解決を得ざる故先づ疑問を發して云ふ、一體大王に勸めて斯く料ひたるは何人なりやと、沛公頗る悔恨の色あつて云ふ此は鄙生の考なり、彼れ我に說くやう關門を取しきりて諸侯を入れ玉ふな、左すれば秦の地は盡く手に入るべしと、因て其說に從ひたるなり、良云ふ大王今士卒を比較せらるゝに、項王の軍に敵對するに十分なりと思ひ玉ふや、沛公暫時無言の後云ふ、無論及ばず、去りながら其れは何れにせよ、先づ如何にすべきやと、良云ふ自分の考にては大王が項羽に對し別心なきを項伯に物語らんと思ふ、沛公云ふ君は如何にして以前より項伯と別懇なるや、良云ふ秦の全盛なりし時彼は臣と交際し、彼或る時人を殺して殆ど免れざりし處、自分之を救ふて活路を得しめたり、此の如き緣故ある處より此度の急變にも善き鹽梅に來て自分に告げ知らせしのみと、

沛公機敏にも己れの安危項梁に繫れることを看破せしかば、先づ良に問ふ君と年齢は何れか多く何れか少きと、良云ふ彼は臣より年上なり、沛公云ふ君取敢ず余の爲に此處へ呼入れ吳れよ、余は兄分として之を待遇すべしと、張良表へ出で無理に項伯を引入れて沛公に逢はしめぬ、沛公杯を捧げて悅を述べ、姻家の約束を結びおきて徐に說出すやう、拙者函谷關に入り、秦を亡ぼして今日に至るまで秋の毛筋程も自分の身に私せしことなく、官吏人民其れ其れ戶籍を備へ、貨財を藏めたる府庫は一々封印を施し、項將軍の來らるゝを待て引渡申すべき心程なり、關門を守らせたる一事は深く嫌疑を蒙れども、是れ亦一は他盜の出入せざる爲め、一は不慮の變あるを恐れてなり、自分は日夜將軍の來着を待つゝあり將軍に背くなどとは以ての外なり、何卒伯に於て事情を察せられ、自分敢て將軍に背かざる事を言上を爲し玉はれと、項伯は尤と思ひてか容易に之を承諾し且つ之に智慧を授けて云ふ、其儀なれば明日早々に自身項王の陣所へ往て謝罪をなさゞれば不可なりと、沛公固り異存なかりしかば項伯は其夜の內に我が軍中に返り沛公が陳謝に及びたる口狀を取次ぎ附言して云ふ、沛公が先づ關を破て秦の地を平げざりしならば君何として關に入るを得ん、是れ皆沛公の賜なり、今誰に限らず大功あるをば之を顧みずして擊たんとするは不義なれば、寧ろ其功を愛でゝ好遇せられて然るべしと、項羽は本と沛公が己れを蔑にするとて怒りしなれば、其陳謝を聞くと均しく怒氣も消失せ、項伯の言へるが儘に從ひぬ

沛公旦日從百餘騎來見項王至鴻門謝曰臣與將軍戮力而攻秦將軍戰河北臣戰河南然不自意能先入關破秦得復見將軍於此今者有小人之言令將軍與臣有郤項王曰此沛公左司馬曹無傷言之不然籍何以至此項王即日因留沛公與飲項王項伯東嚮坐亞父南嚮坐亞父者范增也沛公北嚮坐張良西嚮坐范增數目項王舉所佩玉玦以示之者三項王默然不應范增起出召項莊謂曰君王爲人不忍若入前爲壽壽畢請以劍舞因擊沛公於坐殺之不者若屬皆且爲所虜莊則入爲壽壽畢曰君王與沛公飲軍中無以爲樂請以劍舞項王曰諾項莊拔劍起舞項伯亦拔劍起舞常以身翼蔽沛公莊不得擊

其翌日沛公は約束の如く僅に百餘の騎兵を從へ鴻門なる楚の陣に赴き、項羽に遇

ふや陳謝して云ふ、拙者將軍と力を合せて秦を攻めたるが自他方面を異にし將軍は河北拙者は河南と別々に戰爭をなせり、然るに先へ關に入て秦を破り此地に於て見參せんとは思ひも寄らざる事、恙なき威容に接し奉るは大慶の至、只殘念なるは近頃小人の讒言をなす者あり、將軍と臣との間を割かんとせし事なり、然れども拙者は、將軍の之が爲に動かされ玉はざるを知ると、項羽は何の懸念もなきが如く、此の如き讒間の言をなしたるは他人に非す、貴公の左司馬曹無傷なり、若し彼にして貴公を云々せざりしならんには、余と雖も何を以て此度の始末に及ばんや、最早隔心なければ緩々せられよと、沛公を留めて共に酒宴をなせり、其席は項羽と張良と相向ひ、沛公と范增と相向ふ范增を亞父と云ふ所以は、亞は次ぐ、父に次ぐの意、尊敬したる語なり、范增幾度となく目を以て項羽に沛公を殺す決心を促したるも應せざりしかば、三たびまでも己れの腰に帶びたる玉玦を手にて持上げて示したり、然れども項羽は不承知と見え何等の沙汰を爲さゞりき、玦は環の中途少しく斷れて連續せざるもの、是は宛も玦の半より斷絶するが如く、項羽に斷乎として沛公を斬れとの暗示なり、范增は項羽が到底沛公を殺すの意なしと見て取りしかば、項羽の從弟に當る項莊と云へる壯士を召び入れ、之に謂ふ吾が君は女々しくして煮え

切らぬ人なれば、沛公を取逃す恐あり、左れば其方は宴席に入て悅を述べ、儀式濟まば餘興に劍舞を致したしと申出で、許されなば劍舞に事寄せて沛公を座上に斬倒すべし、若しいま殺さゞるときは汝等は他日反て沛公のために虜とならん、努々怠る勿れと、項莊は指圖の如く宴席に入て悅を述べ、右畢て云ふ、折角吾君沛公の酒宴を催さるゝに軍中の事とて音樂のなきは缺典なれば、其代に劍舞を以て興を助けんと、項羽其眞意を知るや知らずや、宜しと一言許可に及びければ、項莊は直ちに、劒を拔て舞ひ始めぬ、項伯さては沛公の一大事と思ふものから、是亦劍を拔て舞歩き項莊沛公の右に廻れば己れも右に廻り、項莊沛公の左に廻れば己れも亦左に廻り、常に吾身を以て沛公を庇ひたる故、項莊沛公を擊たんとすれば項伯を斬るの恐あり、容易に手を下し兼ねたり

於是張良至軍門。見樊噲。樊噲曰。今日之事何如。良曰甚急。今者項莊拔劍舞。其意常在沛公也。噲曰。此迫矣。臣請入。與之同命。噲即帶劍擁盾入軍門。交戟之衞士。欲止不內。樊噲側其盾以撞衞士。仆地。噲遂入。披帷西嚮立。瞋目視項王。頭髮上指。目眦盡裂。項王按劍而跽曰。客何

爲者。張良曰。沛公之參乘樊噲者也。項王曰壯士。賜之巵酒。則與斗巵酒。噲拜謝起。立而飲之。項王曰。賜之彘肩。則與一生彘肩。樊噲覆其盾於地。加彘肩上。拔劍切而啗之。項王曰壯士。能復飲乎。樊噲曰。臣死且不避。巵酒安足辭。夫秦王有虎狼之心。殺人如不能舉。刑人如恐不勝。天下皆叛之。懷王與諸將約曰。先破秦入咸陽者王之。今沛公先破秦入咸陽。毫毛不敢有所近。封閉宮室。還軍霸上。以待大王來。故遣將守關者。備他盜出入與非常也。勞苦而功高如此。未有封侯之賞。而聽細人之說。欲誅有功之人。此亡秦之續耳。竊爲大王不取也。項王未有以應。曰坐。樊噲從良坐。

今や危機一髮沛公の命は風前の燈に似たり、張良は應急の策として樊噲を召入れんと、早々軍門まで出行きて樊噲に遇へり、是れ沛公の入る時從者は皆此處に留め置きたるが爲なり、噲趙良に問ふ今日の模樣は何如なるやと、良云ふ非常に危し、現に項莊劍舞の最中なるが、彼の目的は沛公に在り、噲は然らば危急なるぞ、拙者は內に入て沛公と生死を共にせんと云ひつゝ、立所に劍を腰に挾み盾を抱へて軍門を入るや、戈を持ちたる番兵等は之を差止て內れざらんとせり、噲は盾を横に仄めて衞士を地上に突き倒し、遂に奥深く進入り、幕を押披て宴席へ出づるや直ちに項羽と反對の方向に立ち、目を剝ぎ出して項羽を見つめたるが、頭髮は逆に立ち眥は裂け切れんとする計なり、項王之を見ると均しく劍に手をかけ、膝を屈め身構を爲しながら叱責して云ふ、其處に來りしは何如なる者なるや、良云ふ是は沛公の陪乘者たる樊噲と申す者なりと、項羽は其素生を聞くや忽ち打解け賞讃して云ふ、壯士なり杯を遣すべしと、部下の者之に一斗入の盃を與へしに、噲は拜禮をなして立ち上り立て之を傾けたり、項羽又豕の肩を與へよと命ぜしかば、部下又生豕の肩を與へたる處、樊噲は其持參せる盾を地に反し、其上に豕の肉を載せ劍を拔き之を切り食へり、項羽又云ふ壯士なり尙ほ此上にも能く酒を飲むやと、噲云ふ臣は若し死すべき場合には死をも辭せず、酒の如きは辭するまでもあらず、抑も秦王虎狼の如き暴惡の心あり、人を殺し人を刑するに厭かず及ばざるが如き觀あり、是故に天下皆之に叛けり、懷王諸將と約して最も先に關に入る者は其地に王たるべしと、然るに吾が主人は先づ關に入り秦を破りしと雖も、一事も私せず一物も己れの物とせず謹

で大王を待ち、其關を守りたるは用心の爲のみ、此の如く勤勞あつて功績の高きに拘はらず、封侯の恩賞なきのみか取るに足らざる說を採用して功ある人を誅せんとするは、彼の暴虐にして亡びたる秦の相續者なり、憚ながら大王の御利益に非ざるべしと、項王は是には何等の挨拶も爲さず、座せよと云ひければ樊噲は張良の次席に座を占めぬ

坐須臾。沛公起如厠。因招樊噲出。沛公已出。項王使都尉陳平召沛公。沛公曰。今者出未辭也。爲之奈何。樊噲曰。大行不顧細謹。大禮不辭小讓。如今人方爲刀俎。我爲魚肉。何辭爲。於是遂去。乃令張良留謝。良問曰。大王來何操。曰我持白璧一双。欲獻項王。玉斗一双。欲與亞父。會其怒。不敢獻。公爲我獻之。張良曰。謹諾。當是時項王軍在鴻門下。沛公軍在霸上。相去四十里。沛公則置車騎。脫身獨騎。與樊噲、夏侯嬰、靳彊、紀信等四人。持劍盾步走。從酈山下道。芷陽間行。沛公謂張良曰。從此道至吾軍。不過二十里耳。度我至軍中。公乃入。

暫時座にありしが沛公は身を起して便所に往き、之を機會に樊噲を手招して連れ出せるが、席を離れてより大分時刻の過ぎたるより、項羽は都尉陳平を以て之を催促せしめたり、沛公噲に云ふ、今出て來りし時暇乞をせざりしに此儘逃歸らば宜しかるまじ、去迚再び席へ復するは危險なり何如す可きかと、噲云ふ大なる行は瑣細の謹直に拘はらず、大なる禮儀は小なる辭讓を口にせず、目下先方は殺す者此方は殺さるゝ者なり、何如にして暇乞をなさんやと、遂に逃云る事に決し、張良を遣して項羽に挨拶をなさしむる事とせしが、良問ふ大王來らるゝ時何か進物の品を持參ありしか、沛公云ふ白色なる璧と云へる玉一對、是は項王に献上の積り玉の杯一對、是は亞父に贈る考にて持參はせし者の、此方を殺さんとて勢烈しかりければ、其儘獻じもならず今に及びたり、何卒此方に代て之を獻じ呉れらるべしと、張良は乃ち引受ぬ、此時漢楚陣營の地位は前にもありし如く一は鴻門、一は霸上、其間四十里を隔てたり、沛公は人目に立たぬやう車や騎兵をとゞめ置き、自身のみ拔け出でて馬に乘り、樊噲等四人は劍と盾とを持ち步行にて隨行し、酈山の麓より道を芷陽に取り、間道を擇んで行きけるが、沛公或る地點に到りし時張良に云ふ、最早此より吾陣までは二十里に足らず、足下此より引返さば吾は丁度本陣に達すべし、其時分を見

料ひ項王の陣所に入て挨拶をなすべしと

沛公已去。間至軍中。張良入謝曰。沛公不勝。栢杓。不能辭。謹使臣良奉白璧一双。再拜獻大王足下。玉斗一双再拜獻大將軍足下。項王曰。沛公安在。良曰。聞大王有意督過之。脫身獨去。已至軍矣。項王則受璧。置之坐上。亞父受玉斗。置之地。拔劍撞而破之曰。嗟。豎子不足與謀。奪項王天下者。必沛公也。吾屬今爲之虜矣。沛公至軍。立誅殺曹無傷。

斯くして沛公は虎口を逃れ出でゝ本陣に歸れり、張良は最早よき頃と思へる時分入て項羽に詫して云ふ、沛公は十分酩酊して席に得耐へず、從て暇乞をも申上ぐる能はず、臣に申附け持參の品物を大王と亞父とに獻上に及ぶと、項王云ふ沛公は先刻中座せしが今何の處に在るや、良答ふ、大王何か譴責の思召あると承り、拔け出して獨り歸陣致したるが、今頃は已に陣所へ到着せしならんと、項王は別に怪しめる樣子もなく、璧をば受納して座敷の上へ据置きしが、亞父は玉斗を受取ると之を地上に置き、劍を拔き突き破て曰く、嗟、嗟は殘念に思ふ時發する聲なり、豎子は小供の事、項羽を指す、尙ほ小ぞうと云ふが如し、到底共に事を爲すべき人物に非ず、項王の

天下を奪ふ者は沛公に相違なし、此方の徒は今に沛公の爲に捕虜となるべしと、其失望落膽想ひ見るべし、沛公は幸に恙なく歸陣に及びしが、此度の危難は本と曹無傷より起りたるが故に、直ちに之を誅して其罪を正しぬ

垓下之戰

漢五年。漢王乃追項王至陽夏南。止軍。與淮陰侯韓信。建成侯彭越期會而擊楚軍。至固陵。而信越之兵不會。楚擊漢軍大破之。漢王復入壁。深塹而自守。謂張子房曰。諸侯不從約。爲之奈何。對曰。楚兵且破。信越未有分地。其不至固宜。君王能與共分天下。今可立致也。即不能。事未可知也。君王能自陳以東傅海。盡與韓信。睢陽以北至穀城。以與彭越。使各自爲戰。則楚易破也。漢王曰善。於是乃發使者告韓信彭越曰。并力擊楚。楚破。自陳以東傅海。與齊王。睢陽以北至穀城。與彭相國。使者至。韓信彭越皆報曰。請今進兵。韓信乃從齊往。劉賈軍從壽春並行。屠

城父に至る。垓下に大司馬周殷叛楚に以て舒屠り六に舉げ九江の兵を隨へ劉賈彭越に皆會し垓下に詣る項王に。

漢の高祖が項羽との戰爭に於て恃とせる二將軍は韓信と彭越とにして、此二人十分力を出さざれば成算覺束なきが故に、先づ之を牢絡するの要あり、此一段は實に其手段を述べたるものなり、漢王已に項羽と天下を中分するの約に背て後より之を追擊し、陽夏の南に至て暫く兵を止めたるが、是れ韓信彭越と時日を期して大打擊を加ふる爲なり、然るに漢王の兵は河南の固陵に至りしも、二人の兵は未だ到着せず、反て楚に破られて復び城壁の內に立籠り、濠を深くして防戰に及べり、此時漢王張良に問ふ、諸侯等約束を守らず何如にせば宜しからんと、良云ふ今楚が敗亡せんとするに臨み、韓信彭越の二人名は王なれども實際定まりたる領地あらず、忠節を盡すの張合なきが爲め自然兵を擁して成行を見るのみ、戰爭に來會せざるは尤千萬なり、左れば大王彼等と天下を共分する考にて土地を惜まざれば、直ちに此處に來らしむる事を得るも、然らざるときは今度の戰結局何如なるべきか甚だ覺束なき次第なり、故に大王陳より海までの地を韓信に與へ、睢陽より穀城までの地を彭越に與へ玉はゞ、彼等各自身の利益の爲に戰ふことゝなる、已に自身の利益なる

以上、十分の力を盡すは勿論にて楚を破るは決して難からずと、漢王其言を尤とし、使者を二人の所に遣はし告げしむるやう、力を合せて項羽を擊ち項羽破れなば云々の土地を與へんと、果して張良の察せしが如く、二人の者は領地の事を懸念して出陣に及ばざりし事故、今此證言を得ると共に忽に手を反すが如く、漢王に奉答するやう、只今より直ちに打立申さんと、共に垓下に至りしが其他の諸將も皆垓下に會し項羽の處に達せり

項王軍壁垓下。兵少食盡。漢軍及諸侯兵圍之數重。夜聞漢軍四面皆楚歌。項王乃大驚曰。漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。項王則夜起飲帳中。有美人名虞。常幸從。駿馬名騅。常騎之。於是項王乃悲歌慷慨。自爲詩曰。力拔山兮氣蓋世。時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。歌數闋。美人和之。項王泪數行下。左右皆泣。莫能仰視。於是項王乃上馬騎。麾下壯士從者八百餘人。直夜潰圍南出。馳走。平明。漢軍乃覺之。令騎將灌嬰以五千騎追之。項王渡淮。騎能屬者百餘人耳。

項王至陰陵。迷失道問一田父。田父紿曰左。左乃陷大澤中。以故漢追及之。項王乃復引兵而東。至東城。乃有二十八騎。漢騎追者數千人。項王自度不得脫。謂其騎曰。吾起兵至今八歲矣。身七十餘戰。所當者破。所擊者服。未嘗敗北。遂霸有天下。然今卒困於此。此天之亡我。非戰之罪也。今日固決死。願爲諸君決戰。心三勝之。爲諸君潰圍。斬將刈旗。令諸君知天亡我非戰之罪也。

項羽は垓下の壘壁に據て漢軍に當りしも、兵數は乏しきが上に糧食は盡き果て、形勢甚だ不可なるに反し、漢の方にては本軍は言ふに及ばず、四路の軍馬盡く垓下に集り、幾重ともなく楚の陣を取圍み勢甚だ振ふ、項羽は敵が四方何れの陣に於ても楚國の歌を歌ふを聞き、大に驚いて云ふ漢は何時の間にか我が故郷を手に入れたりと見ゆ、然らざれば何として斯く楚人の多かるべきと、最早武運も末なりと覺えけん、夜る起きて戸張の中に酒宴を開きぬ、項羽の許に虞と云へる美人あり、是は常に寵愛を得て何處へも隨從せる者、又騅と名づけたる駿馬あり、是は項羽の平生乘り慣れたるもの、この兩つながら最期までも心にかゝりければ、悲壯なる調子を以て歌を歌ひつ、慨然嗟嘆自ら詩を作り出せるが、其詩に云ふ我力は山を拔くに足り、我が意氣は一世を蓋ふに足る、然るに運命の窮る處千里の駿足なる騅も最早や一歩も進まぬなり、騅進まず、何とすべけん、其れよりも虞姫よ虞姫よ、死別の時は來りぬ、汝を何とすべけんと、因て幾回となく之を歌ひ、美人又歌を合せ、項羽も感極つて落涙に及び、左右の者も皆涙に咽び首を擧ぐる者なかりき、訣別の宴も已に果しかば、項羽馬に跨り旗本の騎兵八百餘人と、其夜敵の圍を衝き拔け南へと脫走せし處、翌朝に至り漢軍は項羽の逃走せしを覺り、灌嬰に騎兵五千を附けて後より追擊せしめたり、項羽且つ戰ひ且走り、次第に部下を失ひ淮水を渡りし時は騎兵の從ひし者百人餘に過ぎず、辛うじて陰陵に到りし時迷ふて道なき處に出でしかば、一人の百姓に尋ねたるに欺て左へ往かば本道に出づべしと云ふ因て左に出でたれば大なる沼の中に陷り容易に出づる能はず、其間に漢兵は之に追附けり、項羽最早前方へは進み兼ねしかば、兵を引て、東方に向ひ東城に至れば先刻百騎許もありたる兵は又減じて二十八人となりぬ、項羽は自ら脫れ難きことを觀念し、此時までも傍を去らざりし從騎に向て云ふ、吾れ兵を擧げてより今日に至るまで數ふれば八年になりぬ、此間大小七十餘回の戰爭に我が向ふ所は破れ我が擊つ所は從ひ、一度も敗

亡せし事なく、遂に諸侯の旗頭として天下を我物とせしに、今闘らずも此處に於て斯かる難儀に遭ふは此れ天が我を見限れるにて、戰の仕方の惡しきが爲ならず、今日は堅く、討死を覺悟せり左れば最期の思出に決戰を試み必ず三度敵に勝て諸君に見せ申さん、又敵將を斬り死し敵旗を伐り倒して諸君に見せ申さん、諸君よ我が伎倆を見られなば、定めて天が我を亡すにて戰の罪に非ざることを知られなん

乃分其騎以爲四隊四嚮漢軍圍之數重項王謂其騎曰吾爲公取彼一將令四面騎馳下期山東爲三處於是項王大呼馳下漢軍皆披靡遂斬漢一將是時赤泉侯爲騎將追項王項王瞋目而叱之赤泉侯人馬俱驚辟易數里與其騎會爲三處漢軍不知項王所在乃分軍爲三復圍之項王乃馳復斬漢一都尉殺數十百人復聚其騎亡其兩騎耳

乃謂其騎曰何如皆伏曰如大王言

項羽は討漏されたる二十八騎を四組となし、各四方に分れて敵に向ひしも、固り小數の事なれば漢軍は幾重にも之を圍み、楚の君臣は釜中の魚に異らず、項羽從騎に

語をやう、余那の一將を殺して見すべしと、四面に向へる騎兵に命じて小高き處より馳せ下らしめ、山東にて一塊となり、又三方に分るゝ手筈を定め、項羽大に叫んで馳せ下りし處、其勢甚だ凄じかりければ寄手は雪崩を打て路を開けり、項羽は遂に敵將一人を斬れり、此時赤泉侯陽喜は漢の騎兵の將官たりしが項羽を追かけたるに、項羽は目を怒らして叱り飛ばせし處、陽喜は勢に打たれて却走すること數里に及べり、項羽は心の儘に敵中を駈け拔け、其の二十八騎と會せし後又三處に分れたり、漢の方には項羽が何れの處に在るやを知らざりしかば、之も亦兵を三方に分けて取圍めり、項羽は更に馬を馳せて漢の都尉一人と士卒何十何百と云へる多數を殺し、其騎兵を召び集めて人數を點檢せしに、僅か二騎を失ひしのみにて其他は恙なかりしかば、此等の者に向て云ふ、此働は如何に、皆鞍坪に伏し答へて言ふ、實に大王の仰せられたる如くなりと

於是項王乃欲東渡烏江烏江亭長艤船待謂項王曰江東雖小地方千里衆數十萬人亦足王也願大王急渡今獨臣有船漢軍至無以渡

項王曰天之亡我我何渡爲且籍與江東子弟八千人渡江而西今無

一人、還縱江東、父兄憐而王我。我何面目見之。縱彼不言。籍獨不愧於心乎。乃謂亭長曰。吾知公長者。吾騎此馬五歲。所當無敵。嘗一日千里。不忍殺之。以賜公。乃令騎皆下馬步行。持短兵接戰。獨籍所殺漢軍數百人。項王身亦被十餘創。顧見漢騎司馬呂馬童曰。若非吾故人乎。馬童面之。指王翳曰。此項王也。項王乃曰。吾聞漢購我頭千金。邑萬戶。吾爲若德。乃自刎而死。

項羽尙ほ逃れ去るべき望ありしかば、東方へ出でゝ烏江を渡らんとし河岸に到りし處、亭長舟を岸に附け項羽の來るを待ちつゝあり、項羽に云ふ、江東の地たる小なりと雖、尙ほ四方千里の廣さを有し、戶口も幾十萬の多數あり、王たるの價値なきに非ず、取急ぎ舟に乘つて渡り玉へ、今此場處に於て舟のあるは自分のみにて、敵來るとも渡るを得ざれば此上なき都合なりと、項王笑て云ふ否最早此方は天より棄てられたるなれば運命と諦むべし、我何とて此河を渡らんや、首を回せば其昔江東の若者八千人と此を渡て西に向ひたるに、今や此徒は盡く戰死して一人も返るものなく、此地を踐むも心苦しきを覺ゆ、縱令江東の年寄等、昔の緣故を思ひ今の境遇を察し、氣の毒として此方を王に立て吳るゝとも、此方何の申譯あり何の面目あつて之に遇はん、縱令先方にては口に言ひ出さゞるも、此方心に於て愧ぢざるを得ず、折角の好意なるも吾は渡るべき勇氣なしと、因て亭長に云ふ吾れ貴公の好人なるを知るが故、一の托すべき事あり、今吾が乘れる此馬は五年の間乘り慣れたる者にて、之に乘れば駈引意の如く、何れへ向ふも敵する者なく眞に一日千里の逸物なるが、今之を殺すは不愍の至りなれば、貴公に記念として贈る間幸に目を懸け玉ふべしと、項羽は追手の暫く途切れたる間に亭長と物語に及びしが、彼此する內に敵兵又近寄りしかば、項羽は從騎に號令を下し一齊に馬を下て步行せしめ、最早混戰の事とて弓矢などを用ゆべき暇なく、刀劍を揮て斫り合ひけるが、項羽の手にて殺せし者のみにても數百人に達せり、然れども項羽亦金鐵に非ざれば十餘ヶ所の創を受け、不圖背を見れば漢の司馬呂馬童追ひ來る、項羽語を掛けて云ふ、汝は吾が舊交の人にては無きかと呂童流石に槍を着け兼ね、顏をそむけ王翳に向ひ、項羽を指し示して曰く、此れ項王なりと、項羽已に覺悟を定めければ、謂て云ふ、吾は漢にて吾が首を千兩の金と萬戶の領地に購ふと承る、左れば此首を遣はして汝に德づかせんと、自ら首を刎ねて死せり

王翳取其頭。餘騎相蹂踐爭項王。相殺者數十人。最其後郎中騎楊喜。騎司馬呂馬童。郎中呂勝楊武。各得其一體。五人共會其體皆是。分其地爲五。封呂馬童爲中水侯。封王翳爲杜衍侯。封楊喜爲赤泉侯。封楊武爲吳防侯。封呂勝爲涅陽侯。項王已死。楚地皆降漢。獨魯不下。漢乃引天下兵欲屠之。爲其守禮義。爲王死節。乃持項王頭視魯。魯父兄乃降。始楚懷王初封項籍爲魯公。及其死。魯最後下。故以魯侯禮葬項王穀城。漢王爲發哀泣之而去。諸項氏枝屬。漢王皆不誅。乃封項伯爲射陽侯。平皐侯。玄武侯皆項氏。賜姓劉氏。

此よりは項羽死後の事なり、項羽自ら首を刎ねたれば王翳之を取りたるが其餘の騎將等項羽の五體を取らんとて押合ひ踐合ひ、同志打をなして死せしも五六十人もあり、最後に楊喜等の五人項羽の支體の一部分を取り、後に之を合せ見るに項羽の死骸に相違なかりしかば、懸賞せる萬戸の土地を五分し、此五人を封して侯とせり、項羽死せし後其領土は盡く漢に降りし處、魯のみは城を守て漢に從はざりしかは、天下中の兵を以て屠らんとせしも、一方より見れば禮義を守り其君の爲に忠節を盡す事は甚だ感ずべきが故に、成るべく穩に屈服せしめんと項羽の首を持往き城中の者に示せしかば、魯の長老等も最早抵抗の無益なるを知り始て降參せり、是より遙か以前に楚の懷王が項羽を魯公に封じたる來歷あり、又魯が項羽に義を立てゝ最後に下りし事情ありければ、魯公の資格にて之を穀城に葬り、漢王も項羽の爲に弔禮を行ひ、魯を去りたり、又項氏の一門は皆誅を加へざるのみか、盡く諸侯に封じ劉氏を賜はれり

○伯夷傳

夫學者載籍極博。猶考信於六藝。詩書雖缺。然虞夏之文可知也。堯將遜位。讓於虞舜。舜禹之間。岳牧咸薦。乃試之於位。典職數十年。功用既興。然後授政。示天下重器。王者大統。傳天下若斯之難也。而說者曰。堯讓天下於許由。許由不受。恥之逃隱。及夏之時。有卞隨務光者。此何以稱焉。太史公曰。余登箕山。其上蓋有許由冢云。孔子序列古之仁聖賢

人。如吳太伯伯夷之倫、詳矣。余以所聞。由光義至高。其文辭不少概見。何哉。

伯夷の人に勝れたる處は國を讓るの一事に在り、故に先づ古來天下を讓りたる事實を歷擧して次第に伯夷へ落し込めり

載籍は書物の事、夫れ學問に供する所の書物は數千萬卷にして、廣大は廣大なりと雖も、信ずるに足る者少きが故に、聖人の手を經たる六藝、即ち普通六經と稱する詩經、書經、禮記、易經、春秋、樂を以て標準とせざるを得ず、其中詩經書經の二書は缺損に及び其篇數本來のものより少くなりたりと雖も、舜禹時代の禮法政治等は此の二書に因て知ることを得べし、之に據て見るときは堯帝已に老い、隱居せんとして虞舜に天下を傳へたるが、堯の舜に讓り舜の禹に讓れる時代に於て、東西南北の一方を總轄せる四牧の官、並に十二州の牧民官長たる者の推擧せしことあり、乃ち舜の孝行なる事、禹の勤勞せる事を申立てたるより、假に天下の政務を托したる處、其職務を司る數十年、舜は善く百官を整理し諸侯を懷け、禹は善く洪水を治め百姓を安んじ、功高く業興りしかば、斯くては天下の君たらしむるも萬々不都合の儀なかるべしとて終に大政を委任して天下を讓りたり、是れ他なし天下は極めて大切なるすべき、死せんのみ死せんのみ、扨も運命の衰へたるかなと、此の如き歌を作りしが終に首陽山に於て餓死せり、以上は伯夷の事實なるが、此歌などに由て見るときは、伯夷は怨みて居りしか、將た怨みてあらざりしか、如何にも怨みたるやうに覺ゆるなり

或曰天道無親。常與善人。若伯夷叔齊。可謂善人者非耶。積仁潔行如此。而餓死。且七十子之徒。仲尼獨薦顏淵爲好學。然回也屢空。糟糠不厭。而卒蚤夭。天之報施善人。其何如哉。盜跖日殺不辜。肝人之肉。暴戾恣睢。聚黨數千人。橫行天下。竟以壽終。是遵何德哉。此其尤大彰明較著者也。若至近世。操行不軌。專犯忌諱。而終身逸樂。富厚累世不絕。或擇地而蹈之。時然後出言。行不由徑。非公正不發憤。而遇禍災者。不可勝數也。余甚惑焉。儻所謂天道是耶非耶。

余は或人の論を聞く、其の論に云ふ天道は公平にして特に誰と限つて親愛するが如き依怙贔屓なく、始終眷顧する者は善心善行の人のみなりと、伯夷叔齊にして不善の人ならしめば其不幸も怪しむに足らざれども、此二人の如きは善人と謂ふべ

きものと考ふるが、其れとも左に非るか、恐らくは何人と雖も其善人なる事を疑ふまじ、彼は仁德を積み重ね行を潔白にせしことは傳記に掲げたるが如し、則ち或人の說に從ふときは天の愛憐を蒙るべき筈なるに、餓死と云へるやうなる悲慘の最期を遂げたるは何たる次第ぞや、其上孔子三千の門人中六藝に通じて名高き者七十人、其中に於て孔子が好學の二字を許されたるは顏淵一人なり、此に薦とあるは孔子が哀公の問に答へて申されたる語なればなり、孔子が好學と稱せられたる程の賢者なれば、其善人なるは勿論にして善人なれば或人の說の如く是れ亦天の與すべき所なるに、孔子は回也屢空と云ひ玉へり、即ち幾度となく食物の空乏を免れざりし場合あり、糟や糠などの粗末なる物さへも十分ならず、結局早死を爲せり、是に因て見るときは天は善人に對し何とて斯かる報を與ふるにや、又一方を顧みれば殆ど惡人の代表者とも云ふべき盜跖に至ては、每日何の罪咎なき者を殺し、人の生肝を取て之を乾肉となして食料に供し、凶暴邪曲の行を逞うして毫も忌み憚る所なく、何千人と云ふ多數の徒黨を集めて天下に橫行せり、此の如き惡人なれども反て長命を保て往生せり、彼れ抑も何等の德あつて幸を得たるにや、或人の說は益す疑はざるを得ず、此顏淵が德行の人にして短命なりしと盜跖が大惡人にして長命なりしとは、尤も大なる著明の證據なり、右は極めて古き事柄なるが、近世に至ては主義擧動道に外れ、國法人理に背反して而も一生安逸遊樂を縱にし、財產裕にして何等の不自由なく、子孫代々相繼で幸福を傳ふる者あり、又之に反し足を置くにも蹈むべき地なるや否を究め、蹈むべくして始て之を蹈み、言を出すにも言ふべき時なるや否を考へ、言ふべくして始て之を言ひ、行くにも小路をば經ずして公然と大道を闊步し、又公正の事に非れば妄に忠義立を爲さゞるが如き、謹直篤實の人にして災難に出遇ふ者あり、双方とも其例を擧ぐれば殆ど數へ難き程なり、因て善人榮えず不善反て幸なるは如何なる理由なるや、余は之を解するに苦む、世に天道は是なるか非なるかと云ふ議論あれども、余も亦或は然らんと思ふなり

子曰。道不同。不相爲謀。亦各從其志也。故曰富貴如可求。雖執鞭之士。吾亦爲之。如不可求。從吾所好。歲寒然後知松柏之後凋。擧世混濁。淸士乃見。豈以其重若彼其輕若此哉。

左もあらばあれ、天道は天道、善人は善人なり、孔子の言に我と他と執る所の筋道相違する以上、共に協同なし難ければ、彼は彼の爲すに任せ、我は我が信ずる所を行ふ、是れ自他各志の如くになすなりと、孔子は此の見解を抱き玉ふが故に又曰く、富貴

なる者が若し求め得らるゝものならば、鞭を執て君の馬前に控ふる賤しき職分と雖も、自分は是をも厭はず就任すべし、去り乍ら如し、求むる能はざる時には、吾が志の儘に行はんのみ誠に此語を推さんか、天道は恃むに足らず、自分務めて善を行ふべしとの意に非すや、又孔子の語に松柏の如き常盤木も平生は他の樹木と別に變りたる所なきも、大寒の時節に至り他の草木は或は凋み或は枯るゝに拘はらず、獨り蒼々鬱々として色をも改めず姿をも變へざるを見ば、之と同じく世間を擧げて汚れ濁れる中に潔白の士あれば、反映の結果として其潔白は一層著るしかるべし、伯夷は自分の好む所に從へる者にして、節義重く生命輕きが爲に、節義を守て生命を棄てたるのみ、豈に怨むる心あらんや

君子疾沒世而名不稱焉。賈子曰。貪夫狥財。烈士狥名。夸者死權。衆庶馮生。同朋相照。同類相求。雲從龍。風從虎。聖人作而萬物覩。伯夷叔齊雖賢。得夫子而名益彰。顏淵雖篤學。附驥尾而行益顯。巖穴之士。趨舍有時。若此類。名堙滅而不稱。悲夫。閭巷之人。欲砥行立名者。非附青雲之士。惡能施於後世哉。

是も孔子の語なるが、君子は一旦生涯を終りたる後に於て名譽のなきを耻づ、夫れ實あれば名あり、其名譽なきは生存中行の取るに足る者なかりしが爲なり賈誼云ふ、慾深き男は財貨を得んとして其身命をも棄つるに至り、烈士と云ふ氣節の鋭き士は名譽を得んとして其犧牲となることを顧みず、又威張たき志ある者は權力を貪つて之が爲に身を殺して悔いず、然るに一般の普通人は生命を惜み長壽を保つに汲々たり、彼れ此れ志す所各異にして其道とする所同じからざるなり易に朋と朋とは照し合ひ、類と類とは求め合ひ、龍上れば雲起り、虎嘯けば風生ずと、之と同しく聖人の興るや萬物皆明白なると同時に、聖人の德に叶ふ者著はるゝなり、伯夷叔齊賢人なりと雖も我が孔夫子無りせば堙滅したるやも知るべからず、然るに怨是用希と評し玉ひ、又何怨乎と評し玉へるが故に、其名譽一層揚れるに外ならず、顏淵は學問に熱心なる人なりしも、孔夫子無りせば愚なるが如くにて已みたるも亦知るべからず、然るに好學と仰せられ、德行には顏淵と仰せられたる爲に、其行が一層著明に赴きたるにて、蒼蠅は固り遠く飛ぶ能はざる者なれども、驥と云ふ駿馬の尾に附する時は千里の遠方へ往くを得ると一般、顏淵の名を得たる全く孔夫子に隨從せし結果なり、岩や穴に棲む隱者の如き、時に合ふあり、捨てられて用ゐられざ

るあり、時不可なれば是非もなし、即ち前に擧げたる許由務光等其名は消滅して傳はらず、誠に悲むべき至なり、閭巷に住む布衣の人、行を磨き名を立てんと欲する者は、青雲の士即ち聖賢の人に附き其言語文章に因るに非ざれば後世に名を殘す能はざらん

商君列傳

商君者衞之諸庶孽公子也。名鞅。姓公孫氏。其祖本姬姓也。鞅少好刑名之學。事魏相公叔座爲中庶子。公叔座知其賢。未及進。會座病。魏惠王親往問病。曰公叔病有如不可諱。將奈社稷何。公叔曰。座之中庶子公孫鞅。年雖少。有奇才。願王舉國而聽之。王嘿然。王且去。座屏人言曰。王即不聽用鞅。必殺之。無令出境。王許諾而去。公叔座召鞅謝曰。今者王問可以相者。我言若。王色不許我。我方先君後臣。因謂王。即弗用鞅。當殺之。王許我。汝可疾去矣。且見禽。鞅曰。彼王不能用君之言任臣。又安能用君之言殺臣乎。卒不去。惠王既去。而謂左右曰。公叔病甚悲乎。欲令寡人以國聽公孫鞅也。豈不悖哉。

是れ先づ商君の衞に在りし時の事より書き起したるものなり、商君は衞の脇腹より生れたる公子連中の一人にて、名は鞅、公孫姓にて先祖は姬姓なりし、此人少より刑名の學を好む、刑名の學とは法學の類を謂ふ、刑は形に同じ、刑名法術と連稱す、是れは其名を以て其實を責めて、毫も恕する所なし、韓非子に有言者自爲名、有事者自爲形とあり、刑名之學と云へる四字は全篇を一貫し此文の骨子たり、魏の宰相公叔座の家に奉公し、中庶子とて一族の世話掛の如き職を勤め居りたるが、公叔座は唯物ならずと看て取り、之を朝廷に推擧せんとしたれども、彼此れ取紛れ未だ其運に至らざりし內に、公叔は病氣に罹り頗る重體なりしかば、魏の惠王親ら其家に臨み病床を見舞はれ尋ねらるゝに、公叔、若し卿の病が癒えざるやうなる事あらば、實に我が社稷の爲に憂ふべき事なるが、知らず何人を以て後任者と爲すべきやと、不諱とは死する事、其の忌み避くる能はざるより云ふ、有如は萬一と云ふが如し、公叔答て曰く、臣の家に中庶子として召使へる公孫鞅と申す者、年若くはあれど非凡の器量あり、大王國事を以て一切彼に委任なし玉はんこそ願はしけれと、王は氣乘のせざる體にて暫く默然として在られしが、終に是非を言はずして將に還御に及ばん

とせし時、公叔は人拂の上密々言上して云ふ、此國に於て役に立つ者は他國に於ても役に立つ者なり、商鞅若し他國に用ゐらるゝ時は油々しき大事なれば、大王若し彼を用ゐ玉ふ事を御許容なきなれば、是非とも之を殺し玉ふべし、決して此國の界を踰え他國へ入らしむべからずと、王も承諾して立歸られたり、蓋し公叔が魏王に對し商王を用ゐざる以上之を殺すべしと勸めたるは、正面より裏面より商鞅の人物なる事を顯はして王を激し用ゐしめんと爲したるなり、王已に還御に及びたる後公叔は鞅を呼び意中を告げて云ふ、今方主君我に宰相の後任に充つべき人物を問ひ玉へり、余は其方をと言上なしたれども、主君の氣色を窺ひしも採用し玉はぬ樣子なり、余は主君の事を大切とし臣下の事は後廻にする所より、又主君の御爲を謀り大王若し彼を用ゐ玉はぬなれば殺し玉へと忠言を上りし處、主君は余の言を聽入れ玉へり、左れば其方一刻も早く退出せよ、彼是致し居らば捕へられんと、商鞅少も驚ける色なく公叔に向て云ふ、國王君の申立を取上げて拙者を用ふる能はざる程なれば、如何にして又君の申立を取上げて拙者を殺すことあらんや、御安心あれと、其儘留つて去らざりき、是れ商鞅は魏王の暗主にして公叔の言を信ぜざることを看破せしに因る、苟も商鞅を賢なりとすれば用ふべき理なり、用ひざる以上他

國の用を爲すも亦明白なれば之を殺すべき理なり、其賢なるを知らず故に用ひず、其用ひざるに因て殺さゞるを豫知すべし、魏の惠王は公叔の所より宮中に歸られし後左右の侍臣に物語るやう、公叔の病氣は最早危篤なり、其爲めならんか言ふ所全く常識を缺けり、彼れ余に勸め一切の國務を公孫鞅に托せしめんとす、何と間違たる話に非ずやと

公叔已死。公孫鞅聞秦孝公下令國中求賢者將修繆公之業東復侵地。迺遂西入秦因孝公寵臣景監以求見孝公。孝公既見衛鞅語事良久。孝公時時睡弗聽罷而孝公怒景監曰。子之客妄人耳。安足用邪。景監以讓衛鞅。衛鞅曰。吾說公以帝道其志不開悟矣。後五日復求見鞅。鞅復見孝公益愈。然而未中旨。罷。而孝公復讓景監。景監亦讓鞅。鞅曰。吾說公以王道而未入也。請復見鞅。鞅復見孝公。孝公善之而未用也。罷而去。孝公謂景監曰。汝客善。可與語矣。鞅曰。吾說公以霸道其意欲用之矣。誠復見我我知之矣。衛鞅復見孝公。公與語不自知膝之前於

席也。語數日不厭。景監曰。子何以中吾君。吾君之驩甚也。鞅曰。吾說君以帝王之道。比三代。而君曰久遠。吾不能待。且賢君者各及其身顯名天下。安能邑邑待數千百年。以成帝王乎。故吾以彊國之術說君。君大說之耳。然亦難以比德於殷周矣。

是より秦に入る所なり、公孫鞅は其主人たる公叔を失ひ、惠王には採用せられず、前途を思案せる中に、偶然聞込みたる事は、秦の孝公が命令を國中に發して人材を招き集め、先祖繆公の事業の廢したるを補つて、其時代の勢に反し、東方の諸侯より奪はれたる土地を取り戻さんと計畫中なりとの事なり、是に於て鞅は秦國に於て身を立んと遂に西方へと志して秦の境内に入込けるが、孝公の氣に入りの臣景監なる者に手蔓を求め、其周旋に因て謁見するを得たり、此時鞅の孝公に向て意見を述べたる時間は大分久しかりしが、孝公は少も興味を感せざりしと見え、時々居睡をなし耳に入らず、鞅は其儘退出する事となれり、後に孝公は景監を見たる時怒て云ふ、汝の客なる公孫鞅彼は無法なる奴に過ぎず、何として用ふる價値あらんやと、景監は己れ周旋したる事なれば頗る恐縮に及び、歸宅の後鞅を責め何故に君主の機嫌を取損せしやと問ひしに、鞅云ふ此方先づ公に向て帝道を說きたる處、公は十分會得し玉はざりしと、此より五日を經て拜謁の沙汰あり、鞅は又謁見を遂げたるに今度は以前の時に異り、公の機嫌は大に回復したりとは云へ、其言ふ所に至ては未だ王の意思に的中せず、其儘退出せし後孝公復び景監に不足を言はれければ、景監又鞅に不足を言へり、鞅云ふ此度は吾れ王道を說て見たるも未だ王の腹に入らざりきと、其後又沙汰あつて謁見するや孝公の心に叶ひたれども、未だ任用するに至らずして暇を賜はれり、孝公景監に云ふ、汝の客面白き奴なり相談相手とするも差支なしと、鞅は監に告げて云ふ、今度は吾れ霸道を以て公に說きたるが之を用ゐ玉はんとする樣子見えたり、尙ほ一度謁見を遂げしめよ、公の心中は吾れ能く見拔きたり、之を說き落して見すべしと、因て又も謁見することを得たるが、孝公は之と物語せしに一として心に叶はざるは無く、知らず知らず膝を乘出せる程にて五六日を經るも退屈せられず、頗る滿足の態なりしかば、景監怪で鞅に問ふ、足下如何なる說を以て吾君の思召に適中せしや、吾君の御機嫌斜ならずと、鞅云ふ初め吾れ君公に帝王の道を勸め、夏殷周三代の仁義に同じからざる可らざることを說きたるに、君公は汝の說く所は一朝一夕にして行はるべきものに非ず、其結果を見るには

永遠の年月を要すること故、予は其れまで待つ能はず、且つ賢君は皆一代の中に功業を立て名譽を輝かすものなり、然るに何とて悠長に何百年と云ふ後に至り帝王の業の成就するを待つべけんと仰せられたれば、余は手短かに國勢を強うすべき手段を說けり、是れは本來君公の望み玉ひし所なれば、其れゆゑ大に滿足し玉へるのみ、然しながら此術にては到底君德を殷湯周武に比することは成り難し、此點は初より含み置かれたしと

孝公既用衞鞅。鞅欲變法。恐天下議己。衞鞅曰。疑行無名。疑事無功。且夫有高人之行者。固見非於世。有獨知之慮者。必見敖於民。愚者闇於成事。知者見於未萌。民不可與慮始。而可與樂成。論至德者不和於俗。成大功者不謀於衆。是以聖人苟可以彊國。不法其故。苟可以利民。不循其禮。孝公曰善。甘龍曰不然。聖人不易民而教。知者不變法而治。因民而教。不方而成功。緣法而治者。吏習而民安之。衞鞅曰。龍之所言。世俗之言也。常人安於故俗。學者溺於所聞。以此兩者居官守法可也。非所與論於法之外也。三代不同禮而王。五伯不同法而霸。智者作法。愚者制焉。賢者更禮。不肖者拘焉。杜摯曰。利不百。不變法。功不十。不易器。法古無過。循禮無邪。衞鞅曰。治世不一道。便國不法古。故湯武不循古而王。夏殷不易禮而亡。反古者不可非。而循禮者不足多。孝公曰善。以衞鞅爲左庶長。卒定變法之令。

此處は變法の事を叙するなり、孝公は鞅の說を悅び遂に之を任用し、鞅は其抱負せる富國强兵の術を行はんが爲めに先づ法を變せんとせしが、必ず反對者あるべきを恐れ先づ天下の俗論を制せんと欲し、己れの說を立てゝ曰く、成不成を疑ひながら行ふ事には決して名譽なく、是か非かに惑つて行ふ事には功績なし、且つ世間一般の人に超えたる行ある者は世間より非難を受け、衆人の知らざる所を識る者は必ず愚民より輕侮せらる、愚人は淺見なれば事の結果に闇く、知者は之に反して事を未萌に見る、元來百姓なる者は事の始に彼此相談するに足らず、唯其成就せし後結果を樂しむべきのみ、至極の德を論ずる者は俗人と一致し難く、大功を成す者は衆人と相談せず、是故に聖人の所爲は苟も國を强うすべきなれば先例に從はざる

ことあり、苟も人民に利益を與ふべき事なれば形式に拘泥せざることありと、孝公之を聞て尤なる意見とせられたり

秦の臣下に甘龍と云へる者あり此席に連りしが、鞅の議論に反對を試みて曰く、其論は誤れり、凡そ古の聖人即ち後世の標準となすべき聖君の教化を施すや、決して人民の習俗を改めずして之を導き、又智力の優れたる者の國を治むるや、法度や禮制を變更せずして遂ぐ、是れ何故なりやと云ふに、民俗の儘に教化を布く時は別に力を用ゐずして容易に好結果を收むべく、從來の法度に從つて治むる時は役人も取扱に經驗あり、人民も安堵して騷動すること無ればなりと、鞅は之を駁して曰く、今甘龍の言ふ所は普通世人の唱ふる俗論にして取るに足らず、平凡の人間は兎角在來の習慣に安んじ進取の心なく、學者は自分の聞知に溺れて其範圍を出づる能はず、此の二種の人物は己れの授けられたる職分を保ち規律を守るには宜しきも、法の外に出で非常の事を爲すに當つて彼此れ言を交ふに足らざる者なり、且つ彼の夏殷周の三代の王道も、其根本とする所の禮は時代に因て一ならず、齊の桓公を初として有名なる五霸の功業も、其基礎とする所の法は各均しからず、是れ皆世に應じ宜しきに從ふに非ずや、抑も才智ある者は自ら禮を作り出し、智慧の足らざる

者は其法に制せられ、賢德ある者は古來の禮を改めて適當となし、愚昧の者は其禮に拘つて變通する能はず、故に甘龍の論の如きは取るに足らずと、然るに又一人杜摯と云へる者進み出でゝ守舊說を唱へしが、其言に變法は輕々しく行ふべからず、凡そ新法舊法に比して百倍の利益あるに非ざれば舊法を變へざる者なり、新器舊器に比して功能十倍せざる以上は舊器を易へざる者なり、何事に因らず古制を手本とすれば仕損じなく、古禮に從へば道に外るゝ憂なし、斯くするときは無難なるに、何として事々しく改革を行ふの理あらんやと、鞅又た論じて曰く、天下を治むるの道は種々の方法あり、一定せる者に非ず、要する所は利害便否の問題なり、故に若し其國に便利なれば古制に法らずして可なり、此の理由により殷の湯王周の武王は古制に循はず、放伐などを行うて天下を取りしも遂に王業をなし、夏の桀王殷の紂王は古制を守りたれ共亡びたり、是故に古制に違ひたりとて強ち誹謗すべきに非ず、古禮に從ひたりとて決して優とするに足らずと、孝公は固り鞅と同說なりしかば之に贊成し、尤なりと言ひて鞅を左庶長の重職に任じ、卿大夫の地位に在り、鞅已に其手腕を揮ふべき地位に立ちしかば、卒に改革に着手變法の條例を定めたり

令民爲什五而相收司連坐不告姦者腰斬告姦者與斬敵首

姦者與降敵同罰民有二男以上不分異者倍其賦有軍功者受上爵爲私鬪者各以輕重被刑大小僇力本業耕織致粟帛多者復其身事末利及怠而貧者擧以爲收孥宗室非有軍功論不得爲屬籍明尊卑爵秩等級各以差次名田宅臣妾衣服以家次有功者顯榮無功者雖富無所芬華令既具未布恐民之不信已乃立三丈之木於國都市南門募民有能徙置北門者予十金民怪之莫敢徙復曰能徙者予五十金有一人徙之輒予五十金以明不欺卒下令令行於民朞年秦民之國都言初令之不便者以千數於是太子犯法衞鞅曰法之不行自上犯之將法太子太子君嗣也不可施刑刑其傅公子虔黥其師公孫賈明日秦人皆趨令

是は變法の令なり、先づ人民に什伍を設けしむ、五家を一組とし之を伍と名づけ、伍を二つ組み合せたる者を什と名づく、凡そ其組合中に法を犯す者あるときは互に告發し、之を告發せざる時は九家卷添となる、又謀反の如き姦惡を企つる者あり、之

貪名の人となるの恐あり、故に敢て交際を願はずと、是に於て商君は良が己れに對し不滿足なるを知りしかば之に問うて云ふ、足下は吾は秦に於ける政治を善となさゞる乎と、良云ふ凡そ己れの身に立歸つて他人の論評を聽き取るを聰と云ひ、己れの內心に立歸つて其善惡を察するを明と云ひ、吾が身を以て吾が私に打勝つを强と云ふ、虞舜の言に自ら卑下して增長せざれば人も從つて尊敬する故貴ぶべしと、今閣下の爲に言はゞ此虞舜の道を吾が道として行はるゝが第一なり、拙者に尋ね玉ふ必要あるを見ずと、是は趙良が商君の權威盛なるを恃み驕慢に失することを諷諫せしなり、商君云ふ始め秦は戎狄野蠻の敎にて父子の別なく、一家妻を共にし更に人倫の道なかりしを、余が政を執りしより此の如き野蠻の敎を變更して道理あるものとし、男女の區別をも新に之を定めて不倫の事なからしめ、大に冀闕を築き其構造や魯衞の制度の如く、此國の一偉觀を成せり、足下は余の秦に於ける政績を見て五羖大夫と孰れが優れると思はるゝや、余は窃に其比に非ずと思ふなりと、五羖大夫は百里奚と云へる人にして、秦の繆公に仕へんとせし時、五羊の皮を賣り其代價にて贄を調へたる所より此名あり、趙良は云ふ、千頭の羊の皮は狐の腋皮一枚に及ばず、之と同じく何事にも尤なりとて媚び諛ふ者一千人ありとも一人の

諤々と正言するに若かず、周の武王は諤々の正言を用ゐて興り、殷の紂王は墨々と闇愚の言を聽て亡びたり、閣下若し武王の直言を好みたることを惡しからず思ひ玉ふなれば、拙者も終日正言を申上げん、然し其れが爲に御咎なければ幸の至なれども、商君云ふ古語にも有るが如く上邊のみ立派にして人氣に投ずる言說は華の如き者至極の道理を含みたる言說は實の如きものなりと、又聞くに苦々しく覺ゆる語は藥の如く己れに利あり、吾心に叶ふ語は疾の如く身に害あり、先生誠に終日正言を爲し賜はらば、拙者に取つての藥石なれば謹んで先生に從はんとす、然るに先生何ぞ辭退し玉ふ事あると

趙良曰。夫五羖大夫。荊之鄙人也。聞秦繆公之賢。而願望見。行而無資。自鬻於秦客。被褐食牛。期年。繆公知之。擧之牛口之下。而加之百姓之上。秦國莫敢望焉。相秦六七年而東伐鄭。三置晉國之君。一救荊國之禍。發政封內。而巴人致貢。施德諸侯。而八戎來服。由余聞之。欵關請見。五羖大夫之相秦也。勞不坐乘。暑不張蓋。行於國中。不從車乘。不操干戈。功名藏於府庫。德行施於後世。五羖大夫，死。秦國，男女流涕。童子不歌謠。春者不相杵。此五羖大夫之德也。

是れ趙良の議論中五羖大夫を以て商君と比較し、非常に其反對なるを示す處なり、良云ふ閣下は五羖大夫と孰れか愈ると言ひ給ふが、其五羖大夫は南蠻なる楚に屬する荊の田舍漢にて、其素生は取るに足らず、秦の繆公の賢君なることを聞き何とかして謁見を得たしと望み居りしも、旅費に乏しかりければ、是非に及ばず吾が身を秦の客に賣て奴隸となり、褐と云へる毛布の短衣を着て牛飼をなせり、斯くして一年を過せしに、繆公は其賢なる事を聞き牛口の下に鄙しき生活をなせる百里奚を引上げ、百姓の上に立たしめて國政を委ねたるが、秦國の人民一人として之に對し彼是議論する者あらざりし、此人秦の宰相たること六七年、其間に東方鄭の國を伐ち、晉の惠公、懷公文公の三君を立て遣はし、又一度荊の災を救ひ、國內に敎令を布きたる結果巴人も德化を慕ふて入貢し、諸侯に恩惠を施したる結果八種の戎人來り服せり、五羖大夫の力に因り秦國が此の如く强盛に赴きたりと聞き、由余と云へる賢人も亦門を叩て五羖大夫に遇はんことを請ひぬ、而して此人の秦の宰相たりし時、其身分の貴きに拘はらず、如何に疲勞するも車上に安坐することなく如何に暑氣烈しき日と雖も日除の絹傘を差掛けず、國中を巡回するにも後乘の車を從へ、

ず、又別に武器を執れる護衛兵を伴はず、其功跡を書き留めたる記錄は府庫に藏し、德行は人口に膾炙して後世に傳はり其死するや秦國は男となく女となく盡く流涕して之を悲しみ、童子も歌を歌はず、又臼を撞く者も杵歌を遠慮せり此れ他なし五羖大夫の德に因て然りしなり

今君之見秦王也。因嬖人景監以爲主。非所以爲名也。相秦不以百姓爲事。而大築冀闕。非所以爲功也。刑黥太子之師傅。殘傷民以駿刑。是以積怨蓄禍也。教之化民也。深於命。民之效上也捷於令。今君又左建外易。非所以爲教也。君又南面而稱寡人。日、繩秦之貴公子。詩曰。相鼠有體。人而無禮。胡不遄死。以詩觀之。非所以爲壽也。公子虔杜門不出。已八年矣。君又殺祝懽而黥公孫賈。詩曰。得人者興。失人者崩。此數事者非所以得人也。君之出也。後車十數。從車載甲。多力而駢脅者爲鯔乘。持矛而操闔戟者。旁車而趨。此一物不具。君固不出。書曰。恃德者昌。恃力者亡。君之危如朝露。尙將欲延年益壽乎。則何不歸十五都。灌園於鄙。勸秦王顯嚴穴之士。養老存孤。敬父兄。序有功。尊有德。可以少安。君尙將貪商於之富。寵秦國之敎。蓄百姓之怨。秦王一旦捐賓客而不立。朝秦國之所以收君者豈微哉。亡可翹足而待。商君弗從。

此れ趙良が商君の前罪を數へ後日の禍を示し、現在の處置を敎へたる處なり、良云ふ五羖大夫は秦王より求めて登用せられたるに反し、閣下の秦王に謁見せられたる手續を言へば、國君の氣に入りたる景監を賴みて目的を達したる事故餘り名譽にも非ず、又閣下秦の宰相として百姓の事などは一向心を用ゐられず、徒に冀闕の如き大建築を爲し玉ふは勳功とも謂ふべからず、太子の師傅たる者に刑を課し入墨を行ひ、嚴しき刑罰を以て人民を殘殺するの所行は、人の怨を重ね自分の禍を作る次第なり、閣下の威權は君主の上に在るが故に、苟も訓令を下すときは人民の之に從ふこと君主の命よりも深く、苟も一の處分を行ふときは、人民の之を奉ずること君主の律令よりも速なる上に、今閣下は道に外れたる方法を以て己れの威力を立て、外に出でゝは隨意の君命を變更す、是れ人の敎となるべき仕方に非ず、然るに尙ほ止むことを知らず、國君と同じく南面して寡人などゝ稱し、日々王族の人々を

糾彈して之を罪するは何事ぞや、詩經に彼の鼠を觀るに體を具へてあり、人の禮あるは鼠の體を具ふると一般なり、然るに人とし生れて禮なきは人たる所以を失へり、人たる所以を失へる以上早く死すれば善きにと云へる詩あり、閣下は君臣の禮を失ふ、左れば此詩を以てトふ時は吉祥と謂ふべからず、公子虔は閣下の爲に刑罰に處せられし以來、門を閉ぢて屏居すること已に八年に及べり、然るに君又祝懽を殺し公孫賈に入墨を施し、重々人の怨を買へり、詩經に又人の心を得て悅ばるゝ者は興り、人の心を失つて怒らるゝ者は崩れ亡ぶとあり、今擧げたる數ヶ條は人の心を得べき仕方に非ず、而して閣下の外出せらるゝや後乘の車十餘輛も附從ひ、此等には皆武具を載せ、力量拔群にして一枚肋の如き頑丈なる壯士添へ乘となり、長矛を持し短き鐵柄を施せる片枝の戈を執る者車の左右を警護して行く、此中の一の機關にても不足なるときは閣下決して外出なし玉はず、之を五羖大夫の手輕なるに比すれば雲泥の差にして、自然其心を危ぶむ所あるが故に此の如き護衞を必要とするに非ずや、書經には道德を貴ぶ者は榮え威力を恃む者は滅亡すると云へり、閣下恃む所は威力なり、今閣下の危は朝露の如く、日光に遇はゞ忽ち消失すべし、然るに何ぞ長命を保たんと爲し玉ふや、故に閣下の爲に計れば、今の領土なる商於の十五郡を奉還して田舍に住ひ、日々草木に水を灌ぎ淡泊なる生活をなすに若かず、斯く己れは勇退すると共に、巖穴に世を避くる所の賢士を擧げ、老人を養ひ孤獨を撫育し、年長を貴び、功ある者を次第して爵を授け、德ある者を尊んで其位地を高からしむるやうに、從來の方針を一變せば聊か無難なるべきも、若し商於の富裕なる財源を貪り、秦國の命令に服從するを善き事とし、百姓の怨を買ひ求むるならば、如何なる結果を來たすべきか、今の秦君御宇の間は兎も角も、一旦賓客を遣し置きて崩御せられ、復び朝政を聽かれざる事とならば、秦國に於て時機來れりとて閣下を捕へんとする者必ず少からざるべし、滅亡は片足を擧ぐる間に來るべし、禍目前に迫れりと、趙良は直言を以て商君を救はんとしたれども商君は權勢に戀々たる吾が威力を信じたる爲め從はざりき

後五月而秦孝公卒。太子立。公子虔之徒。告商君欲反。發吏捕商君。商君亡。至關下。欲舍客舍。舍人不知其是商君也。曰商君之法舍人無驗者坐之。商君喟然歎曰。嗟乎爲法之敝。一至此哉。去之魏。魏人怨其欺公子卬而破魏師弗受。商君欲之他國。魏人曰。商君秦之賊。秦彊而賊

入レ魏。弗レ歸不可。遂内レ秦。商君既復入レ秦。走レ商邑。與其徒屬發邑兵。北出擊レ鄭。秦發レ兵攻レ商君。殺之於鄭黽池。秦惠王車裂商君以徇。曰。莫如商鞅反者。遂滅商君之家。

是段商君の末路を叙す、趙良の忠言をなせしより五月を經て商君を寵用せし秦の孝公は卒去に及び、前に新法を犯せし點を以て殆ど商君の爲に糾されんとせし太子位に即けり、太子の守役たりし公子虔の徒豫て時機あらば怨を霽さんと待ち居たる處ゆゑ、商君に謀反の企ありと申立て、捕縛の爲め役人を派遣せしに、商君は之を察して出奔し、函谷關の傍に至り旅店を尋ねて一宿を求めしに、旅店の者は固り之を商君なりと知る由もなく、辭して云ふ商君の新法にて旅券なき者を宿せしむれば罰せらるゝ故宿せしむる能はずと、商君は嘆息して云ふ法令を設けたる弊害は吾身に及ぶ迄に至れるかと、去つて隣國の魏へ往きしが、魏は以前商君が公子卬を欺いて虜となし、遂に魏の兵を破りたることを怨むるを以て受け附けず、商君已むなく他國へ往かんとせしに、魏人考ふるやう、商君は秦の罪人にして此國へ逃げ來れり、秦は強く魏は弱し、若し此處他國へ逃すときは、他日如何なる咎を受るやも計り難ければ歸さゞるを得ずと、遂に秦國へ差戻せり、商君秦に入れども身を寄すべき處なく、舊領地の商於に赴き、以前の關係者と邑中の兵を發し、北に向ひ鄭を伐ちし處、秦より兵を發して商君を攻め、鄭の黽池に追詰めて之を殺し、王命に因て其尸を車裂の刑に處し、廣く人民に示して曰く、商鞅の如き反賊たること勿れと、遂に商君の一族を平げ盡せり

太史公曰。商君。其天資刻薄人也。跡其欲干孝公。以帝王術。挾持浮說。非其資矣。且所因由嬖臣。及得用。刑公子虔。欺魏將卬。不師趙良之言。亦足發明商君之少恩矣。余嘗讀商君開塞耕戰書。與其人行事相類。卒受惡名於秦。有以也夫。

太史公即ち作者司馬遷なり、論評を下して云ふ、商君は生來殘忍にして冷かなる人か、彼の秦の孝公に取入らんとせし時帝王の術を說き出せしことを後より考へ見るに、全く外面の談にて僞を構へ孝公の心を探り見たるのみ、彼の本性に非ず、彼の本性は帝王仁義の道と相反せる者なり、且彼の手引を得たるは嬖臣景監の緣故に由り、登庸せられたる後は公子虔に刑罰を加へ魏の大將たる公子卬を欺き、又趙良

の忠言に從はざりし事等は商君の人情に乏しかりし事を發見するに十分なり余以前商君の著はせし開塞耕戰書なる者を讀みたる處其内容に至ては商君の事跡と相應せる者多く、益々以て其人となりを知るに足れり、然らば彼が末路に反逆の惡名を受けて死したるも決して偶然に非ず

樂毅列傳

樂毅者其先祖曰樂羊。樂羊爲魏文侯相。伐取中山。魏文侯封樂羊以靈壽。樂羊死葬於靈壽。其後子孫因家焉。中山復國。至趙武靈王時。復滅中山。而樂氏後有樂毅。

先づ樂毅の家世より叙し起す、樂毅は其先祖を樂羊と云へり、其以前には別に歷史上著名の者なかりしと見え擧げざるなり、此樂羊は戰國賢君の一として知られたる魏の文侯に仕へ、一軍に將として中山を攻め取りたり功を以て靈壽の地を與へられ、其死するや領分なる靈壽に葬り、斯かる由緒により子孫、代々此地に住ひたり、扨中山は一旦樂羊の爲に亡ぼされし後恢復に及びしと雖も趙の武靈王の爲に復び亡ぼされしかば、樂羊の子孫も從て趙の國民となれり、而して樂羊の子孫に樂毅なる者あり

樂毅賢好兵。趙人擧之。及武靈王有沙丘之亂。乃去趙適魏。聞燕昭王以子之之亂。而齊大敗燕。燕昭王怨齊。未嘗一日而忘報齊也。燕國小辟遠。力不能制於是屈身下士。先禮郭隗。以招賢者。樂毅於是爲魏昭王使於燕。燕王以客禮待之。樂毅辭讓。遂委質爲臣。燕昭王以爲亞卿。久之。

此樂毅は賢才あるが上に兵略を好み所謂文武兩道の人なりしかば趙人之を國王に進めたるが沙宮の亂起つて武靈王卒するに及び、趙を去て魏に赴けり、沙宮の亂とは公子成が武靈王を圍みて餓死せしめたる騷動と云ふ、是より先き燕王の噲は宰相の子之に國を讓りたる爲め内亂を引起せしが齊は之に乘じて大に燕を破りたる事あり、然るに燕の昭王位に即くに及び頗る齊を怨み、一日たりとも復讎の事を忘れずして肝膽を碎きしと雖も、奈何せん燕は小國なるが上に其地位は遠く中國を離れ微力にして敵國を制するに足らず、因つて己の身を卑下して士を貴び、先

づ郭隗を禮遇して實例を天下に示し、廣く他國より人材を招ぎ寄せたるが、樂毅は此噂を聞込み、燕に仕へんとする志ありしかが魏の昭王の使と爲つて燕に赴けり、是れ或は樂毅が燕に使節を派遣するの必要を作り出して自ら其任に當りしならん、其れより燕に到り使命を全うしたれば其儘復命せずして留りたる者の如し、燕王は其賢才なるを知り客分として取扱たる處、樂毅は辭退して之に當らず質を委ねて燕の臣下となれり、然れども昭王は尙ほ之を卿の次席として極めて顯榮なる地位を授け、斯くて年久しくなりぬ

當是時齊湣王彊南破楚相唐昧於重丘西擢三晉於觀津遂與三晉擊秦助趙滅中山破宋廣地千餘里與奏昭王爭重爲帝已而復歸之諸侯皆欲背秦而服於齊湣王自矜百姓弗堪於是燕昭王問伐齊之事樂毅對曰齊霸國之餘業也地大人衆未易獨攻也王必欲伐之莫如與趙及楚魏於是使樂毅約趙惠文王別使連楚魏令趙嚮秦以伐齊之利諸侯害齊湣王之驕暴皆爭合從與燕伐齊樂毅還報

是れ樂毅の連合策の成功を叙する處なり、當時六國の中に於て齊は强國の首に居り其君を湣王と云ひしが、其武功を擧ぐれば南の方重丘と云へる地に於て楚の相唐昧を破り觀津と云へる地に於て三晉即ち韓趙魏三ヶ國の兵を挫き、遂に之を同盟せしめて共に秦を伐てり、趙を助けて中山を亡ぼせり、宋を破れり、此の如くにして版圖を弘めたること一千餘里に及び、秦の昭王と高下を爭ひ帝と稱して秦の上に立ちしが帝位のみは久しからずして之を戻せり、齊の勢此の如くなりしかば從來秦に服從せし諸侯も皆翻つて齊を戴かんとせしより、湣王は頗る得意となり驕傲の所行多かりしかば百姓は殆ど忍ぶ能はずして叛かんとするの心あり、是に於て昭王は時機到れりとして如何に齊を攻むべきかを樂毅に問へり、樂毅答ふるやう、齊は桓公の覇業を受け傳へ武威未だ衰へず、土地は大なり人民は衆なり、吾邦の獨力を以て之を攻めんとするは難儀なり、大王是非とも之を伐たんと欲し玉はば趙と楚魏と共同するより善き手段なしと、昭王然らばとて樂毅を遣はして趙の惠文王を說て味方と爲さしめ、楚魏は別人を以て合同を圖らしめたり、樂毅は又齊を伐つの利益を餌として秦を釣りしが是れは趙の手を經て計を行へり、楚趙魏秦の四諸侯は齊の湣王の驕慢暴虐なる事を惡める折柄なれば先を爭うて合體し燕と連合して齊を伐つことを約せり、樂毅は首尾よく使命を果し玆に歸國の上、復命に

及びたり

燕、昭王悉起兵。使樂毅爲上將軍。趙、惠文王、以相國印授樂毅。樂毅於是幷護趙楚韓魏燕之兵以伐齊。破之濟西。諸侯兵罷歸。而燕軍、樂毅獨追至于臨菑。齊、湣王之敗、濟西。亡走保於莒。樂毅獨留徇齊。齊皆城守。樂毅攻入臨菑。盡取齊寶財物祭器。輸之燕。燕、昭王大說。親至濟上。勞軍行賞。饗士。封樂毅於昌國。號爲昌國君。於是燕、昭王收齊、鹵獲以歸。而使樂毅復以兵平齊城之不下者。樂毅留徇齊五歲。下齊七十餘城。皆爲郡縣。以屬燕。唯獨莒即墨未服。

樂毅の戰功を叙す、即ち本傳の骨子たる處なり、燕の昭王は五國同盟成立せしにより全國の兵を召集して樂毅を上將軍に任せり、而して趙の惠文王も亦樂毅の宰相の印を授けて全權を委ね、樂毅は五ヶ國の連合軍を總べて齊國を征伐に及び濟西の地に破り、四ヶ國の兵は引擧げたれども、燕兵のみは樂毅の指揮の下に追擊して臨菑に至りしが、齊の湣王は濟西に敗軍せしより落延て莒の城へ據れり、樂毅は同盟軍の後に留つて齊の地を略せり、然るに齊の諸城皆籠城して下らず、樂毅は此等

を攻むるに先だつて臨菑に入り此都に在りたる齊國の寶物等を盡く分取して燕に輸送せしかば昭王は多年の望を遂げて大に滿足し、自身濟上に出張の上軍隊を慰勞し賞與を行ひ酒宴を賜ひ樂毅を昌國の地に封じ昌國君と號せり、昭王は此處より齊の戰利品を取纒めて都に歸り、樂毅に命じ齊國の未だ降參に及ばざる城々を攻めしめたり、樂毅は齊に留ること五ヶ年の間に七十餘城を下し、皆郡縣となして燕に屬せしめたる處、齊の城の內に於て只莒と即墨の二ヶ所のみは未だ燕に服せざりき

會燕昭王死。子立爲燕惠王。惠王自爲太子時。嘗不快於樂毅。及即位。齊之田單聞之。乃縱反間於燕曰。齊城之不下者兩城耳。然所以不早拔者。聞樂毅與燕新王有隙。欲連兵且留齊。南面而王齊。齊之所患。唯恐他將之來。於是燕惠王固已疑樂毅。得齊反間。乃使騎劫代將。而召樂毅。樂毅知燕惠王之不善代之。畏誅。遂西降趙。趙封樂毅於觀津。號曰望諸君。尊寵樂毅。以警動於燕齊。

齊の莒と即墨の二城未だ降らざる內に、燕の昭王卒し其太子位に即けり、之を惠王

とす、王は尚ほ太子なりし時より樂毅を心惡く思ひ居たる事故、即位の後先帝の如くに信用を置かざるべきは明白なり、齊の田單は此事を聞知り反間の計を運らし燕に流言を放つて曰く、今齊の城の内にて燕に降らざるものは只莒と即墨の二ヶ所に過ぎず、然るに早く之を陷いれずして時日を費すものは仔細ある事にて聞く所によれば樂毅は今度の王と仲惡しく、何時までも戰を長引かせ齊に留つて遂に自ら王たらんとするに外ならず、齊は只他の將軍が來つて莒と即墨とを拔かんことを恐ると、惠王は初より樂毅を疑ひし處今又齊の反間を聞て益す之を疎んじ、騎刼と云へる將軍をして樂毅に交代せしめ樂毅を召び返さんとせり、樂毅は惠王の自分に惡意あつて交迭せしめたることを知りしかば、若し歸るときは誅せらるゝに相違なしと思ひ、遂に西方の國なる趙に降りし處趙は之を觀津に封じ號して望諸君と云ひ、樂毅を尊重して頗る燕齊等の國を脅せり

齊田單後與騎刼戰。果設詐誑燕軍。遂破騎刼於即墨下。而轉戰逐燕。北至河上。盡復得齊城。而迎襄王於莒。入于臨菑。燕惠王後悔。使騎刼代樂毅。以故破軍亡將失齊。又怨樂毅之降趙。怨趙用樂毅。而乘燕之弊。以伐燕。燕惠王乃使人讓樂毅。且謝之曰。先王舉國而委將軍。將軍爲燕破齊。報先王之讎。天下莫不震動。寡人豈敢一日而忘將軍之功哉。會先王棄群臣。寡人新即位。左右誤寡人。寡人之使騎刼代將軍。爲將軍。出暴露於外。故召將軍。且休計事。將軍過聽。以與寡人有隙。遂捐燕歸趙。將軍自爲計則可矣。而亦何以報先王之所以遇將軍之意乎。

惠王の悔恨を叙し其樂毅に與ふる謝狀を掲ぐる處なり、樂毅に代りたる騎刼は固り田單の敵に非りしかば彼の計に乘り即墨の城下に於て大敗し、田單は燕の敗兵を追擊して河上に至り樂毅の爲に陷られし七十餘城を取戻せし後莒より襄王を迎へ臨菑の城へ入れたるが、燕の惠王は騎刼を以て樂毅に代へたるが爲め敗軍の上幾何の將校は戰歿し折角手に入れたる齊の土地を失ひしを後悔すると共に樂毅が趙に降りたるを怨み、且又趙が樂毅を用ゐ燕の疲弊に乘じて攻擊を加へんかと頗る不安の念に堪へず、是に於て人を以て樂毅を非難せしめ且つ之に謝して云へるやう、我が先代の昭王は燕の國事一切を擧げて將軍に全權を委ね、將軍は此國の爲に敵國の齊を破り先王の仇を報ゐられたるが、其功烈の赫々たる天下の耳目

を聳動せり、此方何として將軍が斯く此國の爲に立てたる大功を忘れんや、然るに折も折とて昭王群臣を棄てゝ崩ぜられ、此方新に王位を繼ぎ、何事にも不案内の處より近侍の者に誤られて將軍を呼返せしは大なる過なり、然れども此方も惡意あつて呼返せしに非ず、騎刼を交替の爲め遣せし所以は他なし、將軍久しく戰場に勞苦なせしかば休息を與へたく、且は後事をも相談なさんと欲したるのみ、然る處將軍は之を誤解に及ばれ從て此方に心善からず、遂に燕を去て趙の國に身を寄せられたる事と思はる、成程將軍自身の都合より言はゞ得策なるべし、然れども先王が將軍に對せし好意を如何にせらるゝやと

樂毅報燕惠王書曰。臣不佞。不能奉承王命以順左右之心。恐傷先王之明有害足下之義。故遁逃走趙。今足下使人數之以罪。臣恐侍御者不察先王之所以畜幸臣之理。又不白臣之所以事先王之心。故敢以書對。臣聞賢聖之君不以祿私親。其功多者賞之。其能當者處之。故察能而授官者。成功之君也。論行而結交者立名之士也。臣竊觀先王之舉也。見有高世主之心。故假節於魏以身得察於燕。先王過舉。厠之賓客之中。立之群臣之上。不謀父兄。以爲亞卿。臣竊不自知。自以爲奉令承教可幸無罪。故受命而不辭。先王命之曰。我有積怨深怒於齊。不量輕弱。而欲以齊爲事。臣曰。夫齊霸國之餘業。而戰勝之遺事也。練於兵甲。習於戰攻。王若欲伐之。必與天下圖之。與天下圖之。莫若結於趙。且又淮北宋地。楚魏之所欲也。趙若許而約四國攻之。齊可大破也。先王以爲然。具符節。南使臣於趙。顧反命起兵。擊齊。以天之道。先王之靈。河北之地。隨先王而舉之。濟上之軍受命擊齊。大敗齊人。輕卒銳兵長驅至國。齊王遁而走莒。僅以身免。珠玉財寶。車甲珍器。盡收入於燕。齊器設於寧臺。大呂陳於元英。故鼎反乎磨室。薊丘之植。植於汶篁。自五伯以來。功未有及先王者也。先王以爲慊於志。故裂地而封之。使得比小國。諸侯。臣竊不自知。自以爲奉命承教。可幸無罪。是以受命不辭。臣聞賢聖之君。功立而不廢。故著於春秋。蚤知之士。名成而不毀。故稱於後世。若先王之報怨雪恥。夷萬乘之彊國。收八百歲之蓄積。及至棄群

臣之日。餘教未衰。執政任事之臣。修法令。慎庶孽。施及乎萠隷。皆可以教後世矣。臣聞之。善作者。不必善成。善始者。不必善終。昔伍子胥說聽於闔閭。而吳王遠跡至郢。夫差弗是也。賜之鴟夷而浮之江。吳王不寤先論之可以立功。故沈子胥而不悔。子胥不蚤見主之不同量。是以至於入江而不化。夫免身立功。以明先王之迹者。臣之上計也。離毀辱之誹謗。墮先王之名。臣之所大怨也。臨不測之罪。以幸爲利。義之所不敢出也。臣聞古之君子。交絶不出惡聲。忠臣去國。不潔其名。臣雖不佞。數奉教君子矣。怨侍御者之親左右之說。不察疎遠之行。故敢獻書以聞。唯君王之留意焉。

是れ樂毅の答書を掲ぐ、樂毅燕の惠王より非難を受けしかば之に答へて云ふ、臣不才にて殿下の御命令を遵奉して御近侍の心を滿足する能はず、乃ち前に召返し玉ひしも敢て歸らざりき、但し歸る時は讒言に罹つて誅戮を受くるなるべし、左あるときは先帝の目がね違となり、又大王をして義を破らしむる道理なれば、恐れて趙に出奔せし處、今大王は人を以て臣の罪を責めしめ玉ふ、臣に於ては君側の輩先王が臣を御眷顧し玉ひし理を察せず、又臣が先王に仕へ奉りたる心を辨へざる事を懸念の餘り、書面を以て對へ奉ること左の如し、臣の承る所に依れば賢聖の君は親族緣者なりとも之が爲に祿を與ふることなく、功の多き者には賞を授け、技の適せし者は之を用ゆ、左れば能力の如何を察して官を授る者は功を成す所の君にして、行を論じ交を結ぶ者は名を擧ぐるの士なりと、然るに臣先王の行動を見奉るに世間の人君より上に出んとするの志あり、故に便宜上魏の使となり自身拜謁の上先王の知己を忝うせり、先王は過ちて臣を客分として待遇せり、又其地位を高くして群臣の上に置き、御一門の方にも相談なく亞卿と爲し玉へり、臣自ら不才をも顧みず、只仰に從ふときは御咎なからんと思ひし儘辭令を拜して辭退せざりき、先王の仰ありけるは余は齊の國に對し積年の深き怨あり、燕の微力なるに拘らず、齊に仇を報いんと欲す、其手段を如何にすべきと、臣之に答へて彼の齊は昔し覇たりし事あつて、今尚ほ其業を傳へ非常なる戰勝國なりしが、今尚ほ其餘習を帶び武器は十分に鍛ひ上げ、兵士は十分演習を重ねたる事なれば、大王若し之を伐たんと欲し玉はゞ燕の獨力にては不可なり、是非とも天下と共同して此事を企てざるべからず、

天下と共同するには先づ趙と結托するが第一なり、且つ淮北の地は楚魏二國の望む所なれば、趙に於て燕と和親を承諾し、四國と同盟して齊を攻むるならば大に破ることを得べしと、先王之を聞て尤なりとて使節たるの信物を臣に授けて趙に遣はし玉ひし處、外交の事幸に目的の如くなりしかば、復命の後兵を起して齊を伐ちたるに、天の無道を惡む所より、又先王の御威光に因り河北の兵を徴發して濟上に進み、濟上の軍は命令に從つて齊を擊ち大に之を打敗り、更に身輕に出立たる鋭兵を率ゐ長追をなして齊の國内に入り、齊王は逃走して莒に入り辛うじて一命を保てり、是に於て齊國の寶器武具等盡く戰利品として燕に持來り、燕の寧臺に陳列し、就中大呂と云へる鐘は元英殿に据ゑ、昔し齊に分捕られたる燕の鼎は元の磨室に入り、薊丘には齊國汶上の竹を植ることゝなり、五伯より後先王の如き大功を立てたる者あらず、先王は多年の志を遂げられしかば快く思召され、之が爲め土地を割て臣を取り立て玉ひ、宛も小國の諸侯と匹敵するを得たり、臣は何事をも辨へず、只御沙汰の如くせば罪を得ざるべしとの考より賜を拜して辭せざりしなり、臣の聞きたるには聖賢の器量ある君主は能く功業を立てゝ之を墜さゞるが故に其名は春秋の書に著はれ、蚤知、即ち先見の士は能く名譽を輝して人より之を害せられざ

るが故に長く後世に稱せらるゝと、先王が齊に怨を報て燕の耻をそゝぎ、萬乘の大諸侯而も强國を平定し、太公望より八百年來積み蓄へたる富は盡く燕の所有に歸し薨去に及びても後に遺し玉へる敎訓未だ衰へず、當局者は法令を改良し種々の禍根を愼み、施て下卑賤の人民に及べる等の事は思慮の密なる處置の宜しき皆後世の手本となるべき者也、臣又聞けるには善く事業を興す者と雖も成功を必すべからず、最初善き者と雖其終は保證なし難しと、其實例を擧ぐれば昔し伍子胥は吳王闔閭の爲に其意見を用ひられ、其結果大に楚を破り、楚の昭王は鄢に出奔するに至れり、然るに次の王夫差は子胥の言を聽かず、之を殺して鴟夷即ち馬革に尸を盛て江水に流せし如きは初あつて終なき者なり、吳王夫差は子胥の先見に從はず、功を立つべきを知らざりしが故に、之を江水に沈めて後悔に及ばず、子胥も亦早くより夫差の己れと度量の異れるを知らざりしが故に江に沈められて成佛せざりき、元來吾が身命を保ち前功を傷けずして、先王の立派なる事跡を明にするは臣に取て此上なき仕方なり、之に反し中傷の惡言に罹り、先王が賢を好み玉ひし名譽を害するは臣の大に恐るゝ所なり、測り難き程の罪に臨み己れの免れたる事をば善しとて今燕の疲弊せるに乘じ之を伐つて己れの利益を謀るが如きことは臣義に於て

敢て爲さゞる所なれば尊慮を安んじ玉ふべし、最後に臣又承る所に據れば古の君子は縱令絶交の後と雖も先方を非難せず、忠臣は國を去ると雖も己れの無罪を主張せずと、臣不敏ながら屢ば君子の敎を聞きたることあれば、何として燕の害をなすことあらん只侍臣等が左右の說を尤なりとして臣の疏遠の行を察せざるが故に敢て此書を獻じて意中を陳べ君王の心を留め玉はんことを希ふと

於是燕王復以樂毅子樂間爲昌國君而樂毅往來復通燕燕趙以爲客卿樂毅卒於趙樂間居燕三十餘年燕王喜用其相栗腹之計欲攻趙而問昌國君樂間樂間曰趙四戰之國也其民習兵伐之不可燕王不聽遂伐趙趙使廉頗擊之大破栗腹之軍於鄗禽栗腹樂乘樂乘者樂間之宗也於是樂間奔趙趙遂圍燕燕重割地以與趙和趙乃解而去燕王恨不用樂間樂間既在趙乃遺樂間書曰紂之時箕子不用犯諫不怠以冀其聽商容不達身祇辱焉以冀其變及民志不入獄囚自出然後二子退隱故紂負桀暴之累二子不失忠聖之名何者其憂患之盡矣今寡人雖愚不若紂之暴也燕民雖亂不若殷民之甚也室有語不相以告隣里二者寡人不爲君取也樂間樂乘怨燕不聽其計二人卒留趙趙封樂乘爲武襄君其明年樂乘廉頗爲趙圍燕燕重禮以和乃解後五歲趙孝成王卒襄王使樂乘代廉頗廉頗攻樂乘樂乘走廉頗亡入魏其後十六年而秦滅趙其後二十餘年高帝過趙問樂毅有後世乎對曰有樂叔高帝封之樂鄕號曰華成君華成君樂毅之孫也而樂氏之族有樂瑕公樂臣公趙且爲所滅亡之齊高密樂臣公善修黃帝老子之言顯聞於齊稱賢師

燕の惠王樂毅の他意なきを知しかば、前功を思ひて其子の樂間を父と同樣に昌國君に取立て、樂毅も舊誼に因て燕との關係を復し、燕趙二國の間に往來せしが、兩國とも客卿の身分を以て之を待遇し、樂毅は終に趙に在て歿せり、樂間は燕に居ること三十餘年にして退身に及びたるが、其原因は燕王喜が宰相栗腹の意見に因て趙を伐たんとせし時樂間に諮詢したる處答へて云ふ、趙は每度四方の敵と交戰し頗る經驗あり、從て人民も兵事を講習し勢侮るべからざるが故に之を伐つは宜しか

らずと、然るに燕王は之を聽入れずして趙を伐ち、趙は廉頗を以て之に當らしめ、其結果燕軍大に敗の地に敗れ、大將の栗腹を初として樂間の一族なる樂乘も趙の捕虜となれり、樂間は之を恨み趙に出奔し趙は勢に乘じて燕を圍み、燕は土地を割て和を乞ひ、趙は始めて撤兵せり、燕王は樂間の意見を用ひずして此の如き屈辱を取りたるを悔い、當時趙に居れる樂間に書を送つて曰く、昔し殷の紂王の時箕子は其言を用ひられざりしも、尚ほ君の顏を犯して諫言をなし、少しも怠ることなくして萬一の採用を希へり商容は吾が志達せず徒に其身の辱を蒙るも尚ほ君主の改心を希ひ結局人心離散し囚人も悉に脫獄するが如く國政紊亂全く望みなきに及んで始て退隱せり、是故に紂は强暴の惡名を負ひ、箕子商容の二人は忠聖の名を失はざりし、何となれば其憂患の極度に達したればなり、今此方如何に愚なるも未だ紂の暴虐には至らず、燕の民亂るゝと雖も未だ殷の民の如く甚しからず、凡そ室家の中に紛紜あるも鄰里に告げざるを法とす、二者寡人不爲君取也、此二者とは古來正義其他の注解あれども皆信ずべからず姑く疑をおくに若かず、蓋し燕王の主意は二人の者趙に在て燕の過失を明にすべからざれば、須く燕に歸り來るべしと云ふに在り、然るに二人は已れの計の用ゐられざりしを恨む所より卒に趙に留り樂乘は武乘君に封ぜられたり、其翌年樂乘は廉頗と共に燕を圍み燕は禮を厚くして和を乞ひしかば圍を解いて退軍せり、其後五年を經て趙の孝成王卒し、其子の襄王樂乘を廉頗に代らしめしかば廉頗怒て樂乘を攻め樂乘は出奔し廉頗も魏に脫走せしが、又十六年を過ぎ趙は秦の爲めに亡ぼされぬ、此れより又二十餘年の後漢の高祖趙を過ぎ樂毅の子孫を尋ね、其孫なる樂叔を見出して樂卿に封じ華成君と號せり、又一族の中にて趙の亡びんとする際、齊の高密に逃がれたる者ありしが其中の一人樂臣公は黃帝老子の虛無の道を修め其名齊國に高く賢師と稱せられたり

太史公曰。始齊之蒯通及生父偃讀樂毅之報燕王書。未嘗不廢書而泣也。樂臣公學黃帝老子。其本師號曰河上丈人。不知其所出。河上丈人教安期生。安期生教毛翕公。毛翕公教樂瑕公。樂瑕公教樂臣公。樂臣公教蓋公。蓋公教於齊高密膠西。爲曹相國師。

司馬遷贊ノ中ニ云ふ、初め齊の蒯通及び主父偃が樂毅の燕の惠王に答へたる書を讀む毎に必らず書物をふせて落涙せしと云ふ、樂臣公は黃老の學問を爲したる人なるが其唯一の師河上丈人は來歷を審にせず、其れより次第に傳はつて樂臣公に至

315
148

史記講義 終

東京高等師範学校
HO
T.N
K.O